
異説ネギま！ ～超 鈴音伝 英霊は胡蝶之夢を見るか～

魔神 1 3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異説ネギま！ ～超 鈴音伝 英霊は胡蝶之夢を見るか～

【Nコード】

N3975S

【作者名】

魔神13

【あらすじ】

ネギま！の二次創作です。

ただしかなりのオリ話、オリ設定で、主人公は英霊として召喚された莊子（南華老仙）。召喚者にしてヒロインの一人なのは、一旦未来に戻るも、再度過去へと渡って来た大人版の超鈴音。

主人公の他にも三体の英霊が超によって同時に召喚されており、その内訳はキャスター（メディア）、ウィッチ（三代目ベアトリーチ

エ）、クラウン（????）となっております。

……ええ、ただ作者が超やメディアさんやベアトと少しばかりイチヤイチャしたいという願望によってこの作品が生み出されたことは否定しません。

超の願いにより、主人公達は「ネギ・スプリングフィールド」が活躍せずとも救われた世界」を作り出す為に動き出します。

この作品にはアンチが含まれますが、ネギアンチは薄めです。どちらかというと、組織やそれを運営する者達、そしてネギパーティーのメンバーの一部に対するアンチです。

ヒロイン勢のキャラ崩壊も多少含む可能性があります。

よって、メディアは葛木先生、ベアトは戦人以外のカップリングを認めない方は見ない方が良いかもです。

作者が調子に乗って、物語中盤辺りで主人公とヒロイン達に『。。。関係』を持たせる可能性があるので、ホントそというのが無理な人は避けた方が無難かも。

また、話が進むにつれ、主人公達は他にも数体英霊（英霊にふさわしい実力を持つマンガやラノベ、アニメ、ゲームの登場人物）を呼び出すことになる予定です。

主人公紹介（前書き）

ぶっちゃけ、カモネギ さんの『魔女と槍兵とチートがネギま！で無双』という名作に感銘を受けた結果、このような物を書き始める事になりました。

割と見切り発車なので、更新は三日に一度あれば良い方だとお考えください。

まずは主人公紹介から入ったのは、「莊子って誰やねん？」という人がいるかもしれないので、一応です。と言っても莊子に関する説明は最後らへんの数行のみw

主人公紹介

主人公

【CLASS】キャスター 仙人

【マスター】超 鈴音

【真名】莊子 姓が莊、名が周、字は子休 仙名は南華老仙

【性別】男

【属性】混沌・中庸

【ステータス】筋力C 耐久B 敏捷C 魔力A 幸運D 宝具B
+ (EX)

【クラス別スキル】

陣地作成 A

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。

西洋魔術師とは違い“廟”や“洞”を形成することが可能。

道具作成 A+

魔力を帯びた器具を作成できるが、呪符や呪具といった東洋魔術に関する物のみである。

魔術書に限れば宝具級の物すら作成は可能。

【固有スキル】

呪術 A (A+)

ありとあらゆる東洋の呪術、死霊術を使いこなせる。

特に、加持祈祷に関しては右に出る者がいない。

呪具を複数用いることにより、その効果を高める。

煉丹術 B (B+)

擬似的な不老不死と肉体の強化が得られる。

ただし、体内に満ちている精や気が枯渇すれば、その効力を失う。
霊地においては、その力をより高める。

カリスマD

軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において、自軍の能力を向上させる。

カリスマは稀有な才能で、一軍のリーダーとしては破格の人望である。

教導C

己より未熟な者の成長を助ける。

本来はより強い力を発揮出来る筈なのだが、かつて教え導いた張角が道を誤った事によりランクがダウンしている。

神性D

神霊適性を持つかどうか。

仙人とは人であって人でなく、神であって神でない存在である。

【宝具】

『太平要術の書』

ランク：B + 種別：対軍宝具 レンジ：0～100 最大補足1000人

ありとあらゆる自然現象を支配、操作する。

ただし、あくまでも自然現象であるため、攻撃対象が英霊格である場合さほど効果が期待できない。

またこの宝具は他人に貸与する事が出来、貸与された人間はランクの宝具としてこれを扱う事が可能となる。

『胡蝶之夢』

ランク：EX 種別：固有結界・対城宝具 レンジ0～100 最

大補足1000人

???

【解説】

中国の戦国時代（春秋戦国時代の後の時代）に産まれた思想家で、道教の始祖の一人とされている。

死後、仙籍に入り南華老仙を名乗る。

南華老仙時代に張角に『太平要術の書』を渡し、世直しを命じるが、張角は朝廷に反旗を翻したものの討たれ、世を大いに乱れさせただけに終わった。

この事を悔いた南華老仙は仙籍を返上し、二度目の死を迎え、英霊となった。

英霊としての望みは、今度こそ『救世』を可能とする弟子を見つけ、教え導くことである。

『救世』を目的とせる超鈴音（大人版）により、原作開始二十年少し前に召喚される。

主人公紹介（後書き）

他のキャラクターの紹介は、何話か挟んでからやります。

プロローグや、一話目は、今日か、明日にでも投稿します。

第一話 呼ぶ者と呼ばれる者達（前書き）

まあ、何とか第一話が書きあがりました。

主人公達の出会いの場面ですね。

何というか、まじめなシーンは本当にキーボードを叩く指の動きが遅い。

最初の??? sideは都合上、超の名が伏せられているので、読みにくいかもしれませんがご容赦ください。

第一話 呼ぶ者と呼ばれる者達

??? side

西暦1982年の梅雨明けしたばかりの初夏。麻帆良学園都市で、麻帆良祭と呼ばれる学園祭の最終日の夜に一人の女性がとある地下施設を闊歩していた。

彼女は、本来学園都市の魔法使い達が嚴重に警備している筈のその重要施設を我が物顔で歩き続け、目的地にたどり着くと足を止めた。

「ふむ……この辺りで良い力」

地下とは思えないような広大な広間。周囲の壁には何本もの太い木の根が走っている。無論ただの木の根ではない。世界樹と呼ばれる『神木・蟠桃』の根だ。普段はただ巨躯を誇るだけのそれが、今は黄金の輝きを放っている。

「もうそろそろ世界樹に満ちる魔力が臨界を越えるはず……時間はあまり無いネ」

そう言つて一撫でした世界樹の根が一層輝きを増す。

それを確認した女性は懷から赤い液体の満ちた瓶と、一本の筆を取りだすと、その液体で地面に魔法陣らしきものを描きだした。

数にして四つ。

そのどれもが同じ魔法陣であつた。

「とうとう完成したネ……後は呪文を唱えるだけヨ」

ふうっ、と一旦息を吐いた女性は、虚空を見つめ、

「触媒を用意できなかったのは痛いネ。誰が出てくるかは運次第。出来る事ナラ、話の通じる相手が出て来て欲しいヨ……」

全身に呪紋を浮かび上がらせた。

魂を削るほどの激痛が女性を襲うが、彼女は苦悶の声一つ洩らさず、決然とした瞳を崩すことなく世界樹の根に右手を添え、残された左手を四つの魔法陣へと向けた。

そして、魔術行使のための始動キーを口にする。

「ラスト・テイル・マイ・マジックスキル・マギステル……」

始動キーを唱え終えた直後、床に描かれていた魔法陣が紅き光を放ち出す。

その光は見る者の心を驚掴むほど鮮烈でありながら、同時にそれを畏怖させるだけの禍々しさをも備えていた。

「さあ、私の呼び声に応えよ、力ある者達よ。

英霊の座にある栄光を得てもなお、更なる何かを欲する偉大な賢者

ども。

我は正しき結末を否定する者。

我は幾度も時を越え、されど未だ望む結末を掴めぬ迷い子。

我は己が人生すらも覆す叛逆者。

我は汝らの望みを叶え得る者なりッ!!」

カアアアアアアアッ!!!

「ッ!!」

呪紋詠唱終了を合図に、世界樹の根による発光と魔法陣による発光がその光量を最大限にまで引き上げる。もはや直視するのも難しいその光景の中で、黄金の線と紅き線が魔法陣の上にて螺旋を描くように交わり――

ズガガッガアアアアアアアンッ!!!

轟音と共に粉塵を撒き散らしながら、四つの影が姿を現す。

「成功したの力……?」

女性の目の前には、四つの魔法陣の上に立つ四人の姿があった。

左端には典型的な魔法使いのローブを着込み、フードと白い仮面で素顔を隠した長身の男。

その横には、同じく魔法使いらしい紫のローブを纏って、俯き気味ながらも妖艶な空気を漂わせる女。

彼女の隣では、魔法使いというより貴婦人然としたドレスを纏い、片手で黄金の煙管を弄ぶ金髪の美女が唇の端を釣り上げていた。

最後に残った右端の人物とは言えば、紅い道袍に身を包み、かぶり物は黒い冠巾、そして足元には雲履と、中国における道士の標準的な服装をしている壮年の男だった。

彼らは互いをチラリと確認し合った後、肉体の表面から呪紋が消えつつある女性へと目を向けた。

「……ッ!」

その四人分の視線を浴びた途端に女性は、見えないプレッシャーが自分の心臓を穿ち抜くを感じた。喉がカラカラに乾き、舌が口内に張り付く。臍には無理やり氷を詰め込まれたかのような圧迫感が押し寄せ、延髄は針を差し込まれたかのごとき痛みを訴えてくる。膝が笑いださないので奇跡なほどだ。

一方、こちらに視線を向けて来ている彼らはどこ吹く風といった表情だ。当然だろう。彼らは別に殺気を放っているわけでもなければ、闘気を身に纏っているわけでもない。極自然体でそこに『存在』しているだけ。ただそれだけで、彼女如きは圧倒できる。

彼ら——人類の破滅を回避するための最終安全装置『英霊』とはそういう存在なのだ。

しばらく互いに沈黙が続いたが、道士姿の男が一步前に出て来て、口を開く。

「……問おう。お主がワシらのマスターか？」

問われた女性はまだ、コクンと首を縦に振った。

莊子 side

（異なことが起こったのう……）

意識を覚醒させた莊子まずそう感じた。

英霊となり「人類という種を守る」為の抑止力——守護者となった
以上は、人類の危機が訪れた際に、現世に受肉する事は当然のこと
だろう。

だが、そういった場合はあくまで守護の為のシステムとして働く為
に、自由意思を持たない人形として人類の脅威を排除し、目的を達
成した後はすぐに消え去り、霊界の様な世界で眠りにつき、新たな
出番を待つのみなのだ。

よって、自由意思を持っている状態で現世に存在しているのはおか
しい。

首を捻ろうとした矢先、莊子は自分の疑問に対する答えを知った。

その答えが、知識として脳内に保管されていたのだ。

（聖杯戦争……じゃと？ ……いや、待て、これは何じゃ？）

冬木市にて行われる聖杯戦争に関する詳細な情報。これらはどうや
ら莊子が召喚された際に魔法陣の力で埋め込まれたものらしいが…

…その情報の最後に、無理やりねじ込んだ形でこう付け加えられている。

『今回の召喚はイレギュラーであり、聖杯戦争とは関係がない』

聖杯戦争を勝ち抜くために英霊をサーヴァントとして召喚する為の方法を取っておきながら、今回は聖杯とは無関係。ならば何故、英霊たる荘子が呼び出されたのか。

深まる疑問に、荘子は自分だけで答えを出すのを諦めて、そつと視線を横に走らせた。

さきほどから無視し難い……どころか、今すぐにでも戦闘態勢を取りたくなるような、強烈なプレッシャーを感じていたのだ。

自分の右隣りには、洋装の金髪美女が立っており、奥にも別に二人ほどローブを纏った者達が立っている。全身から物理的な圧力を持つオーラの様な物が滲み出て来ているのだ、三人とも只者ではない。まかり間違つてこの場に一般人が紛れ込めば、その瞬間卒倒するだろう。

彼女達の足元に、自分と同じく魔法陣がある事を鑑みれば、彼女達もサーヴァントとして呼び出された英霊なのだろう。しかし、正規の聖杯戦争において一か所に纏まって四体もの英霊が呼び出されるのはあり得ないらしい。

荘子以外の英霊たちもこの状況に困惑しているらしく、互いに一度視線を交錯させた際、それぞれの思考を読み合った。

結果として、自分達を呼び出したマスターに話を聞くことに決まる。

四体揃って視線を前へと向け直せば、そこにはマスターらしい女性
が一人、面妖な呪紋らしきものを全身に浮かべてこちらの様子を窺
っていた。

(……ほうほう、なかなかの別嬪じゃのう。ワシがもう少し若けれ
ば口説いておるところじゃ)

等とくだらない事を考えながらも、莊子は相手を観察する。

年の頃は二十歳を過ぎたぐらいであろう。左右で三つ編みとお団子
を作っている黒髪や、肌の色からしたら完全なアジア系だが、瞳の
色が少し赤みがかった茶色だ。背はさほど高くないが、引き締まっ
た長い手足は武術家のそれに近い。

(……ふむう。顔立ちや身体の肉付きからすれば、ワシと同郷の者
の様な気がするが……あの恰好は?)

彼女は足先から手の指先まで、顔以外の全身をピッタリと覆うよう
な、白黒を基調とした衣服を纏っており、その胸には「超包子」な
る三文字が刻まれている。

(……「超包子」とは名前かのう? ……それにしても何じゃな、
こつ、男心にグツとくるのう。中々に見事な胸といい、太股といい
……枯れ果てた老人であるはずのワシでさえ——むむっ?)

煩悩に流されかけた莊子はしかし、自分の手が、見慣れた枯れ枝の
様な物から、血色の良い瑞々しい物へと変化しているのに気づいた。
恐らく手だけでなく、全身が若返っている。

これが「人類守護」の為に、肉体を全盛期のころに戻すというシステムかと、莊子は納得する。

そして、このままぼうつと突っ立っていてもらちはあかないと、一歩踏み出して、問う。

「……問おう。お主がワシらのマスターか？」

女性が頷いた。どうやらマスターで間違いはないらしい。

「名は何というのかのう？ 超包子か？」

「ち、違うネ、それは昔大切な友達と一緒にやてた店の名前ヨ。私の名前は超鈴音ネ」

そうか、超鈴音かと莊子が頷いていると、洋装の金髪美女がなにがおかしいのか「くつくつくつ」と無気味な笑いを漏らし、

「……でえっ？ その超鈴音殿は如何なる用があつて妾たちを呼びつけられたのか？」

と質問を超に投げかけた。

その態度は、玩具をねだる子供よりもあどけなく……魔女狩りに精を出す異端審問官よりも悪意に満ちていた。

そんな金髪美女に気圧されたか、一歩退いた超だったが、意を決したか口を開こうとして、

「待て」

仮面の男の邪魔が入った。

仮面の男は、超の後ろにある通路の先を見据えるかのようにして告げる。

「誰が来る」

「……あら、本当ね。それも結構な数だわ」

紫ローブの女も肯定し、形の良い顎に手を添えた。

そんな二人の言葉に、超は焦り始めたようだ。

「……まずいネ。告白防止の為に出払っていた魔法先生達が先の召喚魔法に気付いて戻て来たヨ。ばれないよう手は尽くしたけど、流石にあれだけの魔力を世界樹から奪えばれる力……」

魔法先生というのがどういった存在か、莊子達は知らなかったがどうやら超にとっては好ましくない存在らしい。

「……ふむう。敵が来るというのであれば蹴散らせば良いのではないかのう?」

こちらには十分過ぎるほどの戦力がある。

莊子の最もな提案に、しかし超は首を横に振る。

「この段階で、私達の存在が麻帆良に知られるのはまずいネ。出来る事なら麻帆良サイドへの介入は、ネギ坊主が来る直前辺りが好ま

しいE」

干渉ではなく介入？ それにネギ坊主？

疑問は尽きなかったが、荘子に考える時間は与えられなかった。

「……じゃあ、転移するわ」

紫ローブがそう言つて、手をかざすと、地面に半径五メートルほどの精緻な魔法陣が浮かび上がった。

「乗りなさい」

位置的に動く必要のない仮面と金髪美女はその場で待機し、超は「これはまさか長距離転移魔法？ 流石は英霊、桁外れの力ネ」とおっかなびっくりしながら魔法陣の中に入る。

荘子もこの場を離れ、争いを避ける事に異論はないので、超に続く。

「超鈴音と言ったかしら。私の手を握つて、隠れ家なり何なり、貴女が安全だと思う場所をイメージしなさい。そこに跳んであげるわ」

「わ、わかたヨ」

超が紫ローブの手を握り、瞼を下ろすと、魔法陣全体が青白く光り始め――

ヒュンッ

——莊子が瞬きしている間に世界が一変していた。

第一話 呼ぶ者と呼ばれる者達（後書き）

うん、あれだ。まじめな話はとっとと進めて。イチヤラブしたい。

次回は、超の望みと、英霊たちの自己紹介です。

第二話 超の望み（前書き）

……一回書き終えたのに、操作をミスして消してしまったorz

超さんが何故、1982年に転移してきたかの理由説明です。

第二話 超の望み

莊子 side

紫ローブの転移魔法で跳んだ先は、マンションの一室のようである。明かり一つついていない室内は真っ暗で、窓から遠く離れた空に上がる花火だけが唯一の光源であった。

「ここまで繰れば安心ヨ」

そう言った超が壁に付いていたスイッチを押すと、室内に明かりが灯る。

「ここは私が使てる拠点の一つで、あの花火の下あたりが麻帆良ネ。さあさ、何も無い所だがくつろいで欲しいヨ」

何も無いというのは謙遜でも何でもなかった。

明かりがついて良く見えるようになったリビングらしき室内には、家具一つ見当たらない。併設されたキッチンに冷蔵庫すらない所を見ると、ここは普段あまり利用していないのだろう。

この状況でくつろげと言われても不可能だ。

莊子が超にツツコミを入れるべきか迷っていると、金髪美女がやれやれと肩を竦め、チラリと紫ローブに視線を向けて、

「くつくつくつ。随分と殺風景な部屋よのう。マスター殿はどうやらもてなしの心得がないようだ。ここは一つ、妾が手本を見せてやるとうかが」

黄金の煙管を一振りした。

すると部屋中に黄金色の蝶の群れが現れる。

幻想的なその光景に荘子が見惚れていると、その蝶達が、次々に部屋のあちこちへと飛び回り、その姿を変えていく。

一羽目は床全体を覆い尽くす赤い絨毯に。

二羽目はベージュのカーテン。

三羽目は壁掛け絵画で、四羽目は台座つきでバラの花が数本活けられた花瓶。

五羽目がリビング中央で木製の円形テーブルに変じ、それを囲むように六羽目から十羽目が椅子へと変わった。

この美し過ぎる魔法に驚きの声を漏らしたのは、超と仮面の男だ。どうやら二人の魔術、魔法に関する常識では驚愕に値するらしい。

紫ローブは忌々しげに口の端を歪めている。どうやらこの魔法が、先ほど転移魔法を使った自分に対抗する為の物だと気付いたらしい。魔女同士の矜持をかけた魔法合戦と言ったところか。

金髪の魔女は三人の反応に少し気分を良くしたようだが、テーブル

の上に視線をやった時、眉を僅かにしかめた。

「ふむ……おかしい。ティーセットは何処に？」

彼女の視線が部屋中を彷徨い、やがて荘子に固定された。

固定された理由は単純。荘子の肩や頭の冠巾の上で、数羽の蝶が羽を休めていたからだ。

「ああ、すまんのう、別嬪さんや。ワシは少しばかり蝶に縁があつてな。お主の邪魔をするつもりはなかったんじゃ。許してくれ」

そう言つて荘子が「お前さん達も、自分の役目を果たさんか」蝶達を促すと、その蝶達はテーブルへと飛んでいき人数分のティーセットと口から湯気を吐くティーポットへと変化した。

「フンッ……無様ね」

紫ローブが金髪美女に嘲笑を向けるが、金髪美女はそれを意にかいするどころか、見る者を怯えさせる笑みを浮かべて「くつくつく」と声を出して笑った。

「構いませんぞ御老体。いや、見た目からするとおじ様とでも呼ぶべきか？ どちらにせよ妾は気分が良い。千年の時を生きてきたが斯様な事は初めての事。まさかまさか蝶どもが妾の命を一時的とはいえ放棄するとは……くつくつく……お主といれば、少なくとも退屈はせぬようだ」

瞳を爛々と輝かせる金髪美女の、こちらの内面を透かし見んとする視線に居心地の悪さを感じた荘子は、さっさと椅子に座り、他の者

たちもそれに続いた。

超が給仕役となり全員のカップに紅茶を注ぐ。

莊子がその紅茶で喉を潤すと、カップに手をつけてすらいらない紫口
ーブが、

「で？ 私達は何故呼び出されたのか、そろそろ説明があっても良
いんじゃないかしら？」

険のこもった声で超に問う。

問われた超はと言うと、アハハッと誤魔化すように笑ってから頭を
かく。

「まずは貴方達の名前を覚えてくれない力？ いつまでも『貴方』
じゃ呼びにくいヨ」

「ふざけないで欲しいわね。現状が全く理解できない上、この場
には自分以外の英霊が三体もいるのよ。敵か味方かも分からない連中
に真名を教えるほど、私は自殺願望を持ち合わせてはいわ」

「くつくつく……紫の魔女殿は随分と臆病な事で。と笑ったものの
妾も名を告げる気はせんな。せめて、妾達が呼び出された理由くら
いは教えてもらわねば」

紫の魔女と金の魔女。

二人の間で火花が散る。比喻ではない。二人の体内から漏れ出た魔
力が反発しあい、本当に火花が散っているのだ。

その火花を目にした超がタラリと冷や汗をかく。

「わ、分かたネ。まず現状を説明するヨ。でもとりあえず呼び名くらいは決めて欲しいネ。でないと説明するのも難しいネ」

ふむ、確かに呼び名くらいは、と四体の英霊がそれぞれ顎に手を添えて考え始める。

一番初めに呼び名を決めたのは紫の魔女だった。

「では、私の事は聖杯戦争のクラスにちなんでキャスターと呼びな
い」

次は金の魔女だった。

「妾も聖杯戦争でならキャスターになる所ではあるが、ここはウィ
ッチと名乗らせていただこう」

莊子は金の魔女がウィッチならばと、

「ではワシはウィザードで行こうかのう」

そう告げる。莊子としては別に真名を教えても良かったのだが、流れに沿うことにしたのだ。

最後に名を告げたのは仮面の男だった。

彼は少しの間ためらった後、

「クラウン」

とだけ言った。

（クラウン？ 王冠？ いやこの場合なら道化師か？）

疑問に思った莊子だったが、呼び名などどうでも良かったので口を挟むことなく受け入れた。

それぞれが名乗り終えると、「では」と超が説明を開始する。

「キャスター、ウィッチ、ウィザードにクラウン。私が皆を呼び出した理由を説明するには、まず一つ理解しておいてほしい事があるのだヨ。それは、私が今から百年以上先の未来からやってきた未来人だというコトネ」

未来人。

クラウン以外の莊子達三人は唸る。

認めないわけではない。四体もの英霊を呼び出す離れ業をやつてのけた超なら、それぐらいはやれるかもしれないと分かつてはいるのだ。ただ、それでも『時間跳躍』という神の御技を人の身で行使したという事実は「へえ、そうなんだ」と受け流せるほど軽い物でもない。

何とか三人が超の言葉を呑み込んだのを見計らって、彼女は続きを口にする。

「私が長時間の時間跳躍をして過去に戻ってきたのはこれで二回目ヨ。

一回目は今から二十年ほど後の世界ネ。そもそも私が最初時間跳躍をした理由は――」

それから超が語った内容は、波乱万丈荒唐無稽な人生を歩んできた英霊たちを退屈させない程度にはドラマチックで、悲劇的だった。魔力の枯渇による魔法世界の消滅とその後の戦乱。そこで起こった悲劇を回避するために過去へと跳び、歴史を改変せんと行動を起す超とその仲間達。

時間跳躍後の超の「魔法ばらし計画」とその実行段階で敵として立ち塞がった、超の先祖ネギ・スプリングフィールドとの対決とその結末。

そこまで語り終えた超は一旦言葉を区切ると、冷めてしまっているであろう紅茶で喉を潤した。

「……ここまでは分かってくれタカ？」

「ええ、内容の真贋はともかく、事の経緯は分かったわ。でも、分からないのは何故一旦未来に戻ったはずの貴女が再度こちらに転移してきたのかという事よ」

キヤスターの言葉を莊子が引き継ぐ。

「そうじゃのう。未来に戻っては見たが、魔法世界とやらの消滅という過去が改変されておらなんだということか？　それで、今度はネギ坊主とやらがおらぬ時代まで遡ってきたと？」

ならば説明はつく。

だが、超は首を横に振って、空になった自分のカップに眼をやりながら優しく微笑んだ。

「そういう事ではないネ。百年先ではちゃんと歴史は改変されていたヨ。私との戦いで心身ともに成長したネギ坊主は、魔法世界消滅の可能性を知り、フエイト・アーウェンクルスが所属していた『完全なる世界』との戦いにも勝利を収め、自らが考えだした魔法世界救済の方法を実行してそれを成功させ、文字通り世界を救って私の知る過去を変えて見せたネ」

ただ。

けれども。

しかし。

と否定の接続詞で超は言葉を繋げる。

「完全に予想外だたヨ——」

優しく笑みは苦痛と悔恨に満ち溢れ、握りしめた拳からはポタリと血が滴り落ちた。

「――過去を改変した事により、未来がより地獄めいたものに変貌するなんデ」

アハハッ、と誤魔化すように笑う超。

「……何故」

クラウンがくぐもった声で問う。

「何故、そうなった？ 世界は救われたのではなかったのか？」

「救われたヨ。そう『魔法世界は消滅しなかった』その点において世界は確かに救われたネ。未来を地獄に変えたのは別の要因……宗教戦争よ」

宗教戦争？

現実世界において、戦争の理由としてはもつとも分かりやすいが、魔法云々の話の中で出てくるには少々理解しがたい単語である。

「何処と何処がぶつかり合ったのかしら？ それとも内部分裂？」

キャスターの質問に超は「内部でもぶつかり、外とも喧嘩したヨ」と答える。

キリスト教？

イスラム教？

まさか仏教は関係あるまい？

荘子はその迷惑な宗教が何処の物が想像つかず、超の説明を待つ。

超は自分のカップに紅茶を注いで、言った。

「スプリングフィールド教ネ」

スプリングフィールド教。

ガタリ、と椅子を鳴らしたのはクラウンだ。

残された三人は事の成り行きを大雑把にはあるが、理解した。

人の愚かさとは、何処まで行っても救いようがないのだ、と。

理解したが故に、表情を険しくし、舌打ちをする者もいれば、両眼を閉じて無然とする者もいる。

そんな英霊たちから視線をそらして、超は「本当にまいったヨ」と語る。

「ネギ坊主の父親、ナギ・スプリングフィールドは魔法世界では知らぬものがないほどの英雄だたヨ。連合と帝国の戦争を裏で操っ

ていた『完全なる世界』の存在を突き止め、これを滅ぼシテ、両国に和平の道を作ったネ。おまけにその後も『悠久なる風』というNGO団体に所属して人助けを繰り返す。英雄の鑑ヨ。その息子のネギ・スプリングフィールドに至ては魔法世界の消滅すら回避させタ入れ直した紅茶にちよつとだけ、口をつけて、ポツリとつぶやく。

「二代続けて英雄を輩出……信仰されない方がおかしいネ」

そこから先は聞くに堪えない内容だった。

世界を救った後も紛争地帯で救護活動が続けたネギ坊主は、次第に各地で英雄視され始め、父親の功績と重ねられて、熱狂的な……それこそ狂信的なまでの人気を魔法世界で得ることとなる。

これを本人なり周囲の人間なりが危惧して、鎮静化に動けば歴史もまた違ったのであろうが、基本的に楽天的なネギと彼の関係者の中にはそのような危惧を抱く者はおらず、たとえ危惧を抱けたとしても鎮静化させるだけの政治力のある人間は皆無だった。

政治力という点では、クルト・ゲイテルなる者がいたが、彼はアリカ王女の名誉回復の為にネギの活躍を最大限利用し、彼の英雄化を推し進めただけであった。

その為、ネギ・スプリングフィールドは生きながらにして現人神として扱われ、彼の死後は魔法世界を救った英雄にして守護神として

葬られた。

その彼の死の前後にスプリングフィールド教団なる物がMMにて生み出され、各地で布教を開始。半世紀も経たない内に、魔法世界全体で信仰されるようになり、一世紀が経った頃には魔法世界でスプリングフィールド教を信仰しない者はいなくなつた。それこそ、母親のお腹の中にいる赤子でさえ胎教の一環として経典を読み聞かせられるのだから笑い話にもならない。

いや、あくまでここまでなら良かったのかもしれない。ただの英雄と宗教の話で終われたのなら、それはそれで一つの結末として受け入れられる。

……問題はそれから後の事だった。

ネギ・スプリングフィールドの生前の冒険譚や彼が口にした言葉を集めた経典の内容の解釈をめぐり、教団内の各派閥が喧々諤々と議論し合い、時には野次すら飛ばして、激しい時には魔法の射矢の撃ち合いにまで発展した。

おまけにネギが多数の女生徒と仮契約していたのを良い事に『自分はネギ様と。〇様の間に出来た子供の子孫である』等と名乗り教団内で権力を得ようとする者が続出。

派閥間の抗争が激化した結果、魔法によるテロや暗殺までもが頻繁に行われるようになり、それが教団内から、一般信徒へと移り、一般信徒が動く事によって彼らが所属する国家も動かざるおえなくなる。

最初はただの小競り合いだった。それこそ死者の一人も出ないよう

な。

だが、それを火種に争いの炎は一気に巻きあがり、あっという間に誰の力をもつてしても消火不可能なまでの規模へと膨れ上がった。

そして、魔法世界で起こったその宗教戦争と、現実世界も無縁ではられない。なぜなら、かつてネギ・スプリングフィールドが魔法を学び、教師として活動してきた現実世界にあこがれる魔法世界人が後を絶たなかったため、現実世界における魔法使い人口が、ネギ坊主の生前とは比べ物にならないほど膨れ上がってしまったのだ。

そんな魔法使い達は、巧みに現実世界の権力機構に身を潜め、魔法を知らない一般人達をも良いように言いくるめて現実世界での戦争に駆り立てた。

ただの戦争ならば、利益が出ないと判断された時点で、どちらかが降伏するかもしれない。だが、これは宗教戦争だ。損得の問題ではない。敵対する者を滅ぼしつくすまで、戦いは終わらないのだ。

そんな無益な戦争が半世紀も続いた結果として、魔法世界の人口は激減し半数を切った。現実世界も似たようなものだ。いや、大量破壊兵器——核兵器すら使われた現実世界の被害はそれ以上と言っべきか。

超が未来に戻ってきたのはまさにそのような時で、事態の深刻さを知った彼女は自分一人では戦争終結は不可能と判断。そして、この戦争の終末を持ち前の天才的な頭脳でシミュレートした結果——

「十年後をめぐに人類の種としての滅亡。また、それを防ぐために人類存続の祈りである『アラヤ』によって英霊が守護者として派遣され『お掃除』が開始されることを知ったネ」

絶望に身を焦がすよりやるべき事がある事を知っている彼女は、まず自分の肉体の埋め込まれている呪紋を改造し、老化を遅らせ、そこから二十二年後の世界樹の発光現象を利用して、過去へと跳んだ。

再び歴史を改変する為に。

「やはり、ネギ坊主に後の事を任さず、私がすべてをコントロールすべきダタヨ」

そう呟く彼女の瞳に、もはや悔恨や苦悩の色はない。

あるのはただ、人類の救済という気高き理想に燃えた決意の色。

黙って話を聞いていた莊子は、そんな超の瞳に自分が魅せられていくのを自覚した。

美しい。

この世にある如何なる存在よりも、今の彼女は美しい。

かつて自分が南華老仙と名乗っていた時に出会った一人の青年と彼女がかぶって見える。

（ワシは……やり直せるのか？ 今度こそ、正しく導けるのじゃろうか？）

超は、話はこれで終わったとばかりにパンパンと手を叩き、聴衆の反応を窺うようにしながらも、最後にこう宣言する。

「我が望みはただ一つ！ 『ネギ・スプリングフィールドが活躍せずとも魔法世界が救われる』……そんな未来だけネ！！」

ためらいはある。

迷いもある。

だが、

それでも、

「手伝てくれるか？ 我がサーヴァント達ヨ」

伸ばされた彼女手を、 莊子は拒めなかった。

第二話 超の望み（後書き）

やっと書けたぜ。

まあ、これで大体、超の動機はお分かりいただけたかな？

スプリングフィールド教や宗教戦争で人類滅亡とか、無理がある気もしますが、そこはスルーでおねがいます。

今回は、超の話を聞いた英霊たちの反応と、次なる行動に移る感じ
です。

第三話 サーヴァント（前書き）

サーヴァント達の、超の誘いに対する反応です。

ちよつと短め。

第三話 サーヴァント

超 side

「手伝ってくれるか？ 我がサーヴァント達ヨ」

伸ばした手は震えていた。

当然だろう。

目の前にいるのは超よりも遥かに強大な力を有する英霊たち。そんな彼らを自分のサーヴァントに——自分よりも下位の存在にならないかと聞いているのだ。

この場で縊り殺されても文句は言えまい。

いや、超は自分が死ぬ覚悟くらいは出来ている。恐れるのは自分が命を落とした事により、未来が変わらず、地獄であり続けることだ。

（一体どれだけの時間が経ったかね？ 十秒？ 一分？ それともまだ一秒も経っていないの力？）

伸ばし続けた手は、不意に温もりに包まれた。

超の手を上下から両手で包みこんでいるのは、道士服の壮年の男。ウィザードだった。

ウィザードの黒き眼が、慈しむように細められる。

「……我が願い、聞き届けてくれるの力、ウィザード？」

ウィザードはただ小さく頷き、両手により力を込めてきた。

そして、好々爺然としていた今までの口調とは違い、覇気に満ちた声音で告げた。

「ワシの姓は荘、名は周、字を子休、また生前に得た仙名を南華老仙という。ここに誓約しよう。超鈴音、ワシはそなたを己の主と定め、マスターを守護するサーヴァント『ウィザード』としてその望み叶うまで、ありとあらゆる助力を惜しまぬ」

ああ、とその場で崩れ落ちそうになる身体を、超は気力で持ちこたえさせる。

かつて超は数多くの同胞と死地を駆け抜けた。その同胞たちに見送られ、過去へと旅立ち、現地で計画成就の為の協力者や理解者、計画とは全く関係ない親友を得た。

だが、未来に戻る際に親友たちとは別れ、戻った先の地獄には自分を送り出してくれた同胞たちの姿はなく、超は一人となった。

孤独で泣くほど弱くはない。

だが、茨の道を一人で歩き、傷つかぬほど強くもない。

ボロボロになってなおも歩き続ける超。その横に今一人の英霊が立

ち、彼女に肩を貸して共に歩き始めてくれたのだ。

（……泣きはしないネ。泣くのは全てが終わった後、そう同胞達と約束したヨ。だから、親友や騒がし過ぎたクラスメイト達との別れも笑顔で押し通したネッ！！）

甘えを見せようとする両眼を叱咤し、

「名高き思想家、仙人として広く知られた莊子殿をサーヴァントとして迎え入れられるとは、光栄の極みネ」

そう畏まって礼を言った後、超はただ「アリガトウネ」と付け加え純粹に微笑む。

二人の誓いが成った直後、握り合った二人の手の上に、もう一人手を重ねる者がいた。

仮面の男、クラウンである。

「……サーヴァント『クラウン』、マスターへの協力を約束しよう。だが、真名は教えられない。それでも構わないか？」

「……構わないヨ。良く分からないけど、名乗れない理由があるのだロ？」

「……ああ、すまない」

三人の誓いが成る。

残るは二人。

そのうちの一人、金髪の魔女ウィッチがこちらを見ながらニタリと禍々しい笑みを浮かべる。

「茶番よな……くつくつくつ……超鈴音よ。妾は妾を敬う者には寛大であるが、そうでない者にはそれなりの罰を与えてきた。そんな妾を使用人サヴァントにしたいと本気で言っているのか？」

ゴウツ!!!

ウィッチの華奢な体から、想像を絶する殺気が放たれ、一瞬にしてリビングの空気が濁り、ビリビリと窓ガラスが軋む。

常人なら発狂しかねない。

そんな中で超は、答える。

自分の手を包む二人分の温もりに支えられて。

「その通りネ。ウィッチ。私はお前の力が欲しいヨ」

ハッと嗤ったウィッチはおもむろに立ち上がると、瞬く間に無数の蝶へと変身し部屋中を飛び回ると、超の背後で再び人の姿に戻った。

そして、超の背後から覗き込むようにして、互いの顔を近づける。
非常に距離が近い。

睨みあうような瞳同士には五センチほどの隙間もないだろう。

一触即発とも言えなそうなそんな状況が十秒ほど続き、

ポン

三人の手の上に、黄金の煙管がおかれた。

「くつくつくつ……時には茶番に混ざるのも一興か。妾も随分と優しくなったものよ。超鈴音よ。妾は汝をマスターとして認めようぞ。サーヴァント『ウィッチ』、真名はベアトリーチエである。この名、ゆめゆめ忘れるでないぞ」

「何と、ウィッチは無限の魔女ベアトリーチエだた力……これは怖ろしい存在を味方につけてしまタヨ……」

「契約は既に成った。いまさら引き返す事は出来んぞ。何せ妾はルールや契約を違える者に向ける慈悲など持ち合わせてはおらぬからな……くつくつく」

（い、今はまだ六軒島の惨劇は起こてないからこの程度の力だが、もし1986年になって事件が公になたら、ものすごい数の人が彼

女が存在を知るネ。そうなたら、知名度や信仰度合いによって力を増減させる英霊である彼女は……ガクガクブルブル、もはや誰にも止められないヨ)

心の中で声にならない悲鳴を上げる超。

そんな彼女の内心を読み取っているのか、いないのか、無限にして黄金の魔女ベアトリーチェはただただ、ニヤニヤと唇を歪め続ける。

そして、最後に残った一人の英霊。

キャスターの決断の時が来た。

ふう、とキャスターがため息をつく。

「そちらに英霊が三体もついた段階で、私は立場的にも戦力的にも詰んでいないかしら？」

「そんなことはないヨ……私はキャスターが参加してくれないからと言って、力づくで言う事を聞かせるつもりはないネ」

「あらそう？ 令呪を使う気はないという事ね？」

超は苦笑する。

「キャスター、今回の召喚は冬木市の聖杯戦争とは違うヨ。柳洞山の龍洞内にて描かれた魔力を溜めこむ魔法陣の代わりに、麻帆良の

膨大な魔力を誇る世界樹を『大聖杯』として使い、貴女達を半ば強引に召喚したネ。だから私には令呪はないのダヨ」

「……召喚された際に貴女は令呪を持っていたようだけど？」

「あれは私の魔力を増加させ、老化を抑える呪紋ネ……使用するには膨大な苦痛と魂の一部が代償となるガ」

「……そう。でも、無理やり召喚された身としては良い気がしないわ」

「それはすまなかたと思っているヨ。でも、召喚する際に条件として私が呼び出される英霊の願いをかなえる事の出来る者だけに限定したカラ、協力の代わりに私はキャスターの望みを叶えられる筈ネ」

「取引……というわけね。そういう打算的なのは嫌いじゃないわ。

……ここでこれ以上ごねても無意味。ならば私としても取引に応じるのがベストね」

仕方ないといった雰囲気全開で、イヤイヤそうにキャスターは手を重ねる。

「超鈴音。私もあなたをマスターとして認めるわ。サーヴァント『キャスター』、真名はメディア。私は貴女が裏切らない限り、取引を続ける事を誓うわ……本当は貴女みたいな中華娘は性に合わないのだけど」

「メディア……なるほど……キャスターが令呪をことさら警戒した理由が分かったネ」

かつてとある女神の命令を受けたキューピッドにより、メディアはとある男を愛する羽目になった。その男の為に家族すらも裏切った彼女の結末を知る超としては、彼女がどれほど心を操られることに忌避感を抱いているのか想像するに難くない。

重ねあわされた四人分の手＋黄金の煙管。

ここに一つの―――されど大きな誓いが成った。

第三話 サークヴァント（後書き）

次も話し合いで、今後の予定を決めます。

で、その次でようやく初めての戦闘。

無双する人もいれば、無双出来ない人もいます。

第四話　夕食会議（前書き）

さて、第一次キャラ崩壊だよ。

といつても、最初ですし、そこまでひどくはないはず。

第四話 夕食会議

莊子 side

四体のサーヴァントとマスター超の契約は成った。

こうなると皆現金なもので、そろそろ夕食が食いたい、暇つぶしが欲しい、一人一部屋寝室はあるのか等と要望を次々に口にしました。

「ええいつ、ちょっと待つヨロシ！ 夕飯は材料がないから今から買い出しに行くネ！ 暇つぶしなら寝室にテレビがあるから持てくれば良いヨ！ 寝室は一部屋しかないカラ、基本皆で雑魚寝ネ！」

最後の寝室の一件では揉めに揉め、最終的にメディアが元々あった寝室とベッドを使い、ベアトリーチェが空き部屋に自分で出したベッド、残りの三人はそれぞれ毛布一枚でリビングの絨毯の上で雑魚寝と決まった。

この議論の結末時に、割を食った三人組が部屋の隅でガタガタ震えながら、暴虐な二大魔女のメンチの切り合いの行く末を見守っていたのは言うまでもない事だろう。

「じゃあ、買い出しに行ってくるけど、皆は外に出ないようにお願いするヨ」

超はそう言って深夜の街へと繰り出した。

残されたサーヴァント達はというと、それぞれ勝手に部屋でくつろぎ始める。

クラウンは一人椅子に座って紅茶をチビチビ飲み続け、ベアトリーチエは寝室から持ってきたテレビを興味深そうに観察した後、電源を入れて。曜サスペンス劇場を見始めた。時折例の「くつくつく」という無気味な笑い声を上げるが、彼女が笑うタイミングはテレビ内で殺人が起こった時だったりする。

フードを取ったメディアは超から借りたこの世界の現代魔術に関する書籍を読みふけり、莊子はというと――

「ほっほっほ。ワシはついとるのう。斯様に見目麗しき女子達と共に一つ屋根の下で暮らせるとは……おおっと手が滑っミギヤアアアアアッ!!」

――フードを取って素顔を露わにしたメディアの美貌に興奮し、話しかけてはウザがられ、セクハラを仕掛けては手酷いしっぺ返しを喰らっていた。

メディアの尻に向かって伸ばされた右手があっさりと捻られ、関節が悲鳴をあげる。

その悲鳴すら鬱陶しいとばかりに、メディアは莊子の手を解放し、あきれ果てた表情になる。

「……莊子。貴方は中国では名の知れた思想家なのよね？」

「はあっ、はあっ、そ、その通りじゃ。自慢ではないが、あちらでは神格化されておるほどの有名人じゃぞ」

「だったらその名聲に相応しい行動を取りなさいな」

「いやあ、ワシは思想的に自由であることや自然であることを尊んでおつてな、『せくはら』とか言つて『肉体的すきんしつぷ』を規制しようとする現代の風潮に意義を唱えるべく行動しておるのじゃ。断じて魅惑的なお主の尻に下心がくすぐられて揉みしだきたいと思つたわけではないぞ。そう、あくまでこれは現代社会に対する高尚な批判なのじゃ」

そう言いきつて胸を張る莊子に、もはやメディアにはツツコミを入れる気力すら残されてはいなかった。ただ、自分の額に手を当ててため息をつく。

無論、生前の莊子の思想がセクハラを肯定している事実などはないのだが、この場にいる者達にそれを確かめるすべはなく、性格に何のある男を味方にしてしまった事を不安に思うだけにとどまる。

「……せめてその爺言葉は何かならないのかしら？ 何だか聞いているとムカムカしてくるのよ。思わずAランク大魔術を顔面にぶち込みたくなるくらい」

「ほっ！ 屋敷数件を吹き飛ばす魔術を顔面に……いや、ワシも外見年齢にあつた言葉遣いにしようと頑張つてはおるんじやが、何分仙人をやつておつた時間が長くてのう。慣れとは怖ろしい物じやよ。昔はもつとはつちやけた喋り方をしておつて、弟子にもう少し威厳のある喋り方をしろと強制させられたものなんじやが……。お、そうじや、お主の様に若い娘御と長く一緒におれば精神も若返り、言葉遣いも治るやもしれぬ。ということできつそく『すきんしつぷ』をぶぎゆるああああああっ！！」

Aランク魔術ではないが、神代の魔術師の『魔法の射矢』を顔面に受けた莊子がノックアウトされる。

「……なるほど。これが『魔法の射矢』ね。威力は低いけど、速射性能と連射性能に関しては優れていそうだわ」

魔法の試し撃ちを終えたメディアは読書に戻ろうとしたが、二人の騒ぎ声が煩くてサスペンスドラマ観賞を邪魔されたベアトリーチエが意地悪げに横やりを入れる。

「……くつくつく。裏切りの大魔女メディア殿は随分とお固い性格の様で。……触って貰える内が華であるうに。過剰な棘で身を覆い尽くせば、バラとて売れ残り枯れるのが定め……くつくつく」

ピキッ。

空気が、凍り。

世界が、軋む。

ギギギッと音を立てて首を動かし、ベアトリーチエへと顔を向けるメディアの額には血管が浮き出ている。それで怒ったような表情をしているならともかく、目と口だけは完璧なまでの淑女の頬笑みだ。

「あら、聞き間違いかしら？　まるで私が年増の行き遅れみたいに言われたようだけど？」

「いやいやまさかまさか、たかが千年しか生きておらん妾の様な小娘魔女が、神代の時代に生を受けた偉大なる大魔女殿をお局様扱い

するなど……くつくつく……ありえませぬよ」

「……そうよね。聞き間違いよね。いやだわ私ったら。てつきり乳臭い小娘魔女が、莊子が私ばかりを口説いて、自分に声をかけてくれない事を妬んで僻みを言ったのかと誤解するなんて。小娘は自分に魅力がない事を理解しているからせめて服装だけでもと、フリルで着飾っているのしょうけど……果てしなく似合っていない事は自明の理なのだから、最初から莊子が声をかけてこないのは想定内の事よね？」

ビシッ！！

突然窓に亀裂が入り、花瓶が破裂する。

「……くつくつく」

「……うふふふふ」

笑顔を交換し合う魔女二人。

莊子は「こいつはまずいぞ……気絶したふりを続行じゃ」と空気を読んで床に倒れ伏したまま。

空気を読めなかったクラウンは「おい、二人とも落ちつ——」と最後の言葉を残し、二大魔女の魔力に吹き飛ばされ、壁にめり込む。

そんな殺伐とした状況で、

「な、なななな、何ねこの状況ハ！？ 私がいなかた十数分の内に何があた力！？」

タイミング悪く帰ってきてしまった超。

彼女がマスターとして二人のサーヴァントの怒りを沈めるには……
下手に介入せず、大急ぎで夕食を作り、最高のもてなしをする以外
にはなかった……。

——数十分後。

ティーセットが並べられていたテーブルには、超自慢の中華料理が
並び、五人はそれに舌鼓を打っていた。

「……悪くないわね」

そう評したのは、冷静な思考を取り戻したメディアだった。

彼女は最初箸の扱いがぎこちなかったが、今では最近の若者より綺麗な箸の持ち方をして、春巻きを自分の小皿に取り分けたりしていた。

「ふっふっふっ。私は中華料理にはちょっとばかり自信があるのヨ」

「くっくっく。確かにこれは言うだけの事はある。これを食せただけでも、お主のサーヴァントになった甲斐があるぞ」

ベアトリーチェも満足げに餃子を頬張り、クラウンは黙々とチンジ

ヤオロースを口に運んでいた。仮面はどうしたのか？ …… 下半分だけ取り外し可能という細かい芸を披露したのだ。

「莊子殿はどうかな？ 故郷の味とは違う力？」

「ほっほっほ。ワシの生きた時代は戦国時代。食糧事情が悪過ぎて、王侯貴族でもなければ斯様な馳走は食卓に並ばんよ。無論、故郷の味とは違うが、満足させてもらっておるぞ」

この和氣藹々とした食事風景を見て、ここにいる五人が一国を容易く滅ぼせるだけの戦闘能力を秘めていると、誰が気付けるだろうか？

（食って、笑って、寝て、愛して……これだけで人は幸せになれる。じゃが、それを理解せん者どもや、欲深き者たちのせいで世は乱れる）

莊子は久方ぶりの幸福を味わってはいたが、自分が何故ここにいるのかを忘れてはいなかった。

海老シユウマイへと箸を伸ばしながら、超に尋ねる。

「超嬢よ。ワシらはこれからネギ坊主とやらの活躍を妨害しつつ、世界を救うべく行動するのじゃろう？ 何か具体的な方策はあるのかのう？」

全員の箸がピタリと止まるが、すぐにまた動きだす。

超は箸からレンゲに持ち替え、ワカメの浮いたスープを意味もなくかき混ぜ始める。

「まずは組織を作るネ。それも、魔法世界、現実世界、表、裏の区別なく影響力のある組織ヨ」

「組織……のう」

「莊子殿が思想的に組織や国家の害悪を憎んでいるのは承知してイルヨ。でも、何か大きなことを為そうと思えば、組織の力は必要不可欠ネ」

「そう……じゃのう。すまんかった、続けてくれ」

「第一段階として、拠点となるべき土地……魔力的価値の高い霊地を、この日本で手に入れるネ。第二段階として組織としての知名度を上げ、第三段階で資金力や魔法戦力を確保して組織の拡大を図るヨ。最終的にはネギ坊主が日本に来る前に、関東魔法協会と関西呪術協会に対抗できる第三勢力を築き上げるのが目標ネ」

なるほどなるほど、と莊子が頷いているとメディアが小首を傾げた。

「……現在魔法世界で起こっているらしい大戦には参加しないのかしら？」

「ううん、最初はそうしようかと思ってたケド、ここで大きく歴史を変えてしまうと私の知る『過去の知識』が役に立たなくなってしまう可能性が高いネ。だから大戦への介入はパスするヨ」

ふうつとため息をついたのはベアトリーチェだった。

「随分と面倒で迂遠な事よ。いつその事、そのネギ坊主とやらを暗殺してしまえば良いのではないか？ 妾に任せてくれれば、妾達が

関与した事を知られることなく、綺麗な『猟奇殺人』に巻き込ませてやるぞ」

過激な発言ではあるが、効率的ではある。

ネギ・スプリングフィールドが早い段階で死ねば、超の言う地獄に近い未来は確実に回避されるのだ。

莊子としても、ベアトリーチエの意見に否はない。

だが、超は首を横に振った。

「……何故かのう？ ベアトリーチエ嬢の案は悪くないと思うが？
もしや、ネギ坊主とやらが死ぬと、超嬢が産まれなくなり、世界に矛盾が生じる事を恐れておるのか？」

「いや、そうではないネ。その程度の矛盾は世界が許容する事を私は知っているヨ。それに私自身が自分の死を恐れているわけでもない……これはただの我儘でしかないネ」

「ほっ？ 我儘？」

超はレンゲから手を離し、テーブルの上で指を組むと、先ほどまで花火が上がっていた空を、麻帆良学園都市を見つめながら苦笑する。

「私はネ、どうにもあのネギ坊主の事が憎めないのだヨ……」

超Side

そう、自分こと超鈴音はネギ・スプリングフィールドを憎めない。

それは彼が自分の祖先である事とは別の問題だ。

「ネギ坊主は未熟者ダタヨ……甘ちゃんで、泣き虫で、真面目が取り柄の良い子ちゃんで」

故郷の村が滅ぼされては、自分のせいではないかと自虐した。

先生になつては生徒に振り回されて、あうあう泣きまくり、取り乱すばかり。

真祖の吸血鬼エヴァンジェリンと戦って負けたら、先生のくせに登校拒否を起こしかけた。

勝ったら勝ったで過剰な自信をつけるし、ペットのオコジヨの口車

に容易く乗る。

学園長の願いで危険な任務を考えなしで受けては、京都で多数の生徒に魔法バレをやらかした。

故郷の仇の悪魔と戦った際は、その命を見逃すという、甘過ぎる判断さえ下してしまう。

拳句の果てに、学祭ではよく知りもしない超を『自分の生徒だから』という理由だけでガンドルフィーニからかばい、世界に対する魔法バレを最初防げず、過去に戻ってやり直しをする羽目になってもいた。

「正義の魔法使い、偉大なる魔法使い、そんな言葉に踊らされ、自分の父親の幻影ばかりを追いつけた愚か者ネ……でも、それでも——」

それでも超はネギ・スプリングフィールドを憎めない。

なぜなら——

「——それでも、確かにネギ坊主は『世界』を『消滅』から救って見せたのだヨ」

彼は確かに未熟者だった。

だが、未熟に甘んじる事を良しとせず、研鑽を積み続け、古菲からは中国武術を習い、エヴァンジェリンからは魔法と戦闘技術を学んだ。

遊びたい盛りの子供であるにも拘らず、ただ全力で未熟を補おうとしたのだ。

彼は確かに泣き虫だった。

だが、戦いから本当の意味で逃げたのはエヴァンジェリンと的一件だけ。それ以外は常に全力で立ち向かい続けた。

己が傷つくことを厭うことなくである。

この世に生きる、どれほどの人間が知っているのだろうか？

全身が石化し始めて呼吸困難になる恐怖を、

顔が腫れあがるほどガイノイドに殴られた時の痛みを、

デスメガネの居合拳で全身を打ち抜かれ、押しつぶされた時の苦しみを、

それらを知ってなお、彼を泣き虫だと笑えるであろうか？

彼は確かに甘ちゃんだった。

だが、それは優しさと同義の言葉でもある。

甘さは戦いにおいて無駄ではあるが、優しさを忘れては人は悪鬼に堕ちる。

優しさと甘さ、使いこなしてこそではあるが、大人でも難しいそれを十歳児に求めることこそがそもその間違いなのだ。

幼くても、顔も名前も知らない何処かの誰かの為に、涙を流せる――その優しさは尊いはずだ。

彼は父親の幻影を追い続けた。

追って何が悪い？

十歳の子供だ。親が恋しくない方がおかしい。ましてや母親に関しては周囲の人間がそろって口を濁し、父親の英雄譚ばかりを聞かせてきたのだ。

おまけに自分のピンチに駆け付け、杖をくれた。その幻影を追わずにいられるはずがないだろう。

時には妄執的になり間違ひも犯したが、時を経ることに世界の裏も知ることとなつた彼は、父親を追ひ、そこに追ひ付かない限り、幻影を振り払えないと知つて『覚悟』も決めた。

正義の魔法使いが絶対的なものでないと理解しても、それでも彼は『誰かの為に有る事』を決意した。

そしてネギ・スプリングフィールドは成長した。

完全なる世界と闘うに足る力を手に入れた。

闘う相手への思いやりを忘れもしなかった。

偉大なる魔法使い、正義の魔法使い……汚い大人達が利用するまやかしのそれではなく、本当の意味での『マギステル・マギ』に彼はなり――

――そして世界を救つて見せたのだ。

そんなネギ・スプリングフィールドを、超鈴音は憎めない。

どれほど迂遠で面倒な手段となろうとも、彼を殺める事は出来ないのだ。

食事の時間は終わった。

皆の前には空の皿が並ぶばかり。

サーヴァント達は一様にマスターの命令を待つ。

ゆえに超は椅子から立ち上がり、毅然と胸を張り、曲がらぬ意志を瞳に込める。

「悪いが私の『我儘』につきあって貰うゾ、我がサーヴァント達ヨ」

「ほっほっほ。随分と可愛い我儘じゃ……ワシらがその程度の我儘を受け止めれぬはずがなかるう。何せほれ、ワシらは英霊じゃからの」

おどけてそう言う荘子に、超は肩の力を抜き、命令を下す。

「私達がまずすべきは、拠点とすべき霊地の確保ネ！ 具体的な場所——」

第四話　夕食会議（後書き）

ネギ擁護って難しい。

でもまあこれで、ネギ暗殺とか、ネギアンチをしない理由は説明できたかな？

次回は戦闘です。

霊地としての候補は幾つかありますが、話の作りやすい場所に、すでに決めております。

第五話 九州征伐 前編（前書き）

ちよつと長くなりそうなので二つに分けます。

第五話 九州征伐 前編

莊子 side

超鈴音が拠点として選んだ地。

それは、日本の南西に位置する島——九州であつた。

九州。

福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、七県からなる、その土地の重要性を説くのに、最も適切な言葉がある。

日本の『玄関口』だ。

現代を生きる若者には理解しがたいかもしれない。何せ今の世の中、国際港は何処にでもあり、空を見上げれば飛行機雲が白線を引いている。

だが、航海技術が未熟だった時代、日本から世界を目指す者、あるいは世界から日本を目指す者にとっては、大陸に最も近い九州が重要な拠点となつたのは言うまでもない事だろう。

かつての朝廷は防人を配置して国土防衛に苦心し、江戸幕府は長崎にて出島を造り限られた異国人との交渉の場を設けた。

そんな九州のもう一つの顔は、日本有数の霊地で有るという事だ。

霊地——魔力的価値の高い土地には大別して二種類ある。寺や神社など人間が手を加えた事により魔力的価値が高まった人工的な霊地と、人類が知恵を持つ以前から魔力的価値の高かった自然的な霊地である。

九州がどちらに属するかというと……実は両方に属する。

大宰府へと左遷された菅原道真が天神として信仰されて出来た太宰府天満宮。

火の国熊本もののシンボルである阿蘇山。

これほど霊地としての格が高い土地は、日本国内ではそうそう見当たらない。

いや、まあ、有る事はあるのだ。恐山とか高野山とか……だが、そういった所を、超が拠点として選ばなかったのには理由がある。

九州以外の霊地のほとんどは、既に関東魔法協会や関西呪術協会といった何処かの魔法組織に完全に掌握され、きっちりと管理されてしまっているのだ。付け入る隙が無い。

では九州はどうなのかというと、魔法組織的には実は戦国乱世、群雄割拠状態だったりする。

主な勢力は、

かつて朝廷から防人と同様に国土防衛のために送られた日本固有の魔法使い（陰陽師とは似て非なる別物）の末裔。

西日本を完全掌握するために関西呪術協会から送り込まれた陰陽師達。

江戸時代に出島にやってきた西洋魔術師（魔法世界ではなく現実世界出身の魔法使い）が密かに作り上げた、隠れキリシタンならぬ隠れ魔法使いの一族。

同じく江戸時代に出来た中国人街を本拠地としていた、中国系の魔法組織。

第二次世界大戦後、麻帆良学園都市と同じように、魔法世界の連合がその影響力を強める為に造りはしたもののあまりうまく機能していない魔法施設とそこに配置された魔法使い。

といった五つの勢力が鎬を削って、日夜一般人の目に触れないよう注意しながらも暗闘を繰り返しているのである。

だからこそ、超や荘子達の様な出自も知れない魔法使い達でさえ、付け入る事が可能と判断されたのだ。

「と、言うわけだな。ワシらもこの土地で活動させてもらう事にしたから、よろしく頼むぞい」

そう、莊子が宣言した瞬間、

「――ッ！」「」

周囲から無数の殺気が放たれ、彼の肌をチクチクと刺激する。

時刻は深夜二時を少し回った所、場所は長崎にある中華街のとある屋敷の中。

人一人消えた所で、世間の目に触れることはないだろう状況だ。

莊子と似たような道士服を着た男達や、武術家として気を全身に纏う男達、計五十名ほどに囲まれながら、莊子は相手側から供された茶で、軽くのどを潤す。

「……そちらの言い分は理解した。だが、我々がこの地を明け渡す理由はない。お引き取り願おうか？」

彼ら中国系魔法使いの顔役らしき初老の男が顎で『追い出せ』と周りの部下に合図する。

（……まあ、そうなるじやろうな。ポツと出の胡散臭い男への対応としては穏便な方じゃが）

ここはもう少し『過激』に対応してもらわねば困るのだ。

そうでなければ『正当防衛』という大義を掲げて、暴れられない。

（ワシが超嬢から命ぜられたのは、中国系魔法組織の壊滅、あるいはワシらへの従属。どちらにせよ、こちらの力の一端を見せつける必要があるのじゃ。それも対外的にこちらに非が無いような状況で）

その為には、使者として出向いてきた莊子に、彼らが暴力的行為を加えるのが一番なのだが……ただ、両肩を抑えるようにして外に連れ出されるだけでは不十分だろう。

ゆえに、莊子はあえて相手を小馬鹿にした態度を取る。

「明け渡す理由ならあるじゃろ」

「……？」

「お主らは、ワシより弱いんじゃし」

「ッ！ 貴様アアアアアアッ！！」

怒声を上げたのは顔役ではなく、その傍に控えていた若い武術家の一人だった。

その武術家は手にしていた青竜刀を振りかぶると、瞬動で一氣に距離を詰め、「止セッ！」という顔役の言葉も聞かずに、莊子の肩に青竜刀を叩きつけた！

ガッ！！

避ける事も、防御する事も出来た莊子だったが、あえてその一撃を受ける。

武骨な刃が莊子の肩の肉を裂き、骨を砕く。

噴出した鮮血が自分の顔を染めあげる中、莊子はこうなつては仕方がないといった表情を作り、顔役へと批難の眼差しを向けた。

「……いやはや、使者に斬りかかるのがこちらの流儀ですか？
それならば、ワシも」

「ッ！！　こうなれば致し方なし！！　息の根を止めよ！！」

弁明よりも口封じを選んだ顔役の判断が良いか悪いかは別にして、その命令は遅きに失した。

莊子は自らの肩に喰い込む青竜刀の刀身を掴むと、力任せにそれを抜きとり、バギイツと音を立てて握りつぶした。同時に煉丹術で肩の損傷を修復する。

そして、宙を舞う刀身の破片を、次々に指弾の要領で周囲に向け打ち出した。

英霊の放つ指弾は音速に近い速度で飛翔し、

「ギャッ！？」「グッ！！」「ツアアア！？」

今まさに莊子に襲いかからんとしていた者達の瞳を穿つ。

「なッ——」

自らの得物を粉碎されて狼狽する若造の襟を掴んだ莊子は、足払い

をかけて彼の体勢を崩し、そのまま力任せに顔役へと投げつける。

「ぬっッ！」

荒くれ者どもを纏める顔役は流石にその程度の攻撃でやられはしない。

投げつけられた若者を避け、即座に懷から呪符を取りだし印を切り出す。

どうやら大がかりな攻撃符術を使おうとしているようだ。そんな顔役を援護すべく、数人の道士が簡易符術で火の玉を発し、莊子を牽制する。

己が身を焼こうとする無数の火の玉を莊子は、

「……ほっほっほ、火遊びとは、子供らしいのう」

腕の一振りで消し飛ばす。

第二撃を放とうとしていた道士達はその事実には驚愕し、動きを止めてしまう。

そんな決定的な隙を莊子が見逃す道理もない。未熟な武術家が見せた瞬動よりも遥かに完成度の高いそれを披露し、道士達の首筋に淡々と手刀を落としていった。

もはや、この部屋でまともな戦闘能力を残すのは莊子と顔役のみ。

チツと舌打ちした顔役だったが、その表情に悲壮感はない。よほど

自分の符術に自信があるのだろう。莊子はあえてその発動を待つ事にした。

「……情けのつもりか！　だがその傲慢さが貴様を滅ぼす！　行くぞ『雷帝招来』！！」

印を切り終わった顔役の呪符から、膨大なエネルギー量の雷撃が莊子めがけて放たれる。

その雷撃は、顔役の切り札であり、この一撃があるからこそ彼は武闘派揃いの中国系魔法使い達の中で顔役を張っていたのだ。

人間一人、容易に融解させるであろうその一撃を莊子は、

「……威力はそこそこじゃが、制御が甘いのだ」

デコピンで跳ね返した。

「ば、馬鹿な!!」

咄嗟に顔役は符による魔法障壁を張るが、自身の最高の一撃を防げるわけもなく、

「——ッア!!」

肉体の幾らかを炭化させ、白目を向いてその場に倒れ伏した。

ほっほっほと笑う莊子は、もはや齒向かう者がなくなった屋敷で、

「まあ、相性が悪かったの、お主たちは。子供の兎戯が、親の神技に通じる訳なかるうて」

自らの末裔と呼ぶべき者達の未熟を、そう評した。

「さて、さてワシ以外の者達は上手くやって……又ッ、これはまずいか？」

険しい表情の莊子は、そう言って瞬時に屋敷から姿を消した。

超 side

長崎の中華街で莊子が暴れている頃、超もまた鹿児島にて戦闘を繰り広げていた。

いや、それは戦闘と呼べるものではない。一方的な蹂躪である。

「くッ！！ また消えたぞ！ 全員周囲への警戒を怠るな！」

そう叫んだ男の背後に突如として現れた超は、彼の背中に気を纏った拳を叩きつける。

ゴキッ

鈍い音とともに、男は泡を吹いて倒れた。

即座に超を囲むのは、防人と共に九州に派遣された日本固有の魔法使いの末裔を名乗る一派である。

だが、戦闘開始当初三十人はいた彼らは、既に五人までその数を減らされていた。

「そろそろ降参して欲しいのだがネ？」

「ふ、ふざけるな！ 我々は由緒正しき日本古来の魔法使いの一族！ 貴様のような得体の知れぬ女狐の軍門になど降れるか！！」

「……そうか、良く分かったヨ。なら、もはや躊躇はしないネ。我が野望の為、露となって消え失せるがヨロシ！！」

再び姿を消した超。

敵対者の全滅をもって戦闘が終了するのは、そのわずか十秒後の事だった。

「ふうっ……カシオペアの代わりに作りダシタ、この転移装置は意外と優れものネ。時は越えれずとも、僅かな魔力で近距離の転移ならやりたい放題……我ながら自分の才能が怖ろしいヨ」

ポンポンと背中中の転移装置を叩いてそう言った超は、合流予定地点を目指して転移を繰り返すのだった。

クラウン side

連合が派遣していた魔法使いの総数は百人にも上った。

だが、それらの全てが戦闘に長けた者達ではない。

七割がたは、拳銃を装備した一般人にすら遅れを取るかもしれない非力な存在である。

ゆえに、クラウンにとって、彼らを制圧するという作業は『戦闘』と呼ぶほどのものではなかった。

彼らが所有するいくつかの施設に向き、そこで一番強い魔法使いを瞬時に叩き伏せる。そして残りの連中を、ただ膨大な魔力を垂れ流す事で委縮させた。後はこの地から去るように『説得』するだけ。

これを数度繰り返す事で、連合は完全にこの九州の地から姿を消した。

時間はかかったが、ある意味平和的な解決でもある。

他のサーヴァントや超等は「甘い」と断じるかもしれないが、方法は各自に委ねられていたので問題はない。

誰が何と言おうと、これがクラウンの生き様なのだ。

ふと、クラウンは遠くの夜空を見つめる。

見知った魔力が、急激に減衰を始めたのだ。理由は不明だがどうやら、彼女はピンチに陥ったらしい。助けに行こうか迷ったが、クラウンが動き出すよりも先に、莊子が彼女の元に駆け付けたのを感じ取り、結局は彼に任せることにした。

ベアトリーチ E s i d e

ベアトリーチエが任されたのは江戸時代に出島から伝わった西洋魔術を連綿と受け継いできた、隠れ魔法使い達の本拠地の制圧。

莊子が襲った中華街から少し離れた山の中腹にあった洞窟が、彼らの本拠地だった。

そう『だった』のである。

「やれやれ……もう少し楽しめるかと思ったが、この程度か」

そうため息をつくベアトリーチエの足元は、血の海であった。

血の海に浮かぶ島々は、かつては魔法使いであったものであり——
今現在はただの肉塊である。

人であった肉塊はそれぞれ体の各部に、杭で穿たれたような痕があり、そこから今なおとめどなく血を流し続けている。

「煉獄の七姉妹は使えるが……他の家具は駄目か、なるほど、超が言っておった通り、妾の力は制限を受けているらしいな。だが、そのような縛りもまた一興……くつくつく」

ちやぷちやぷと可愛らしい水音を立てて血の海を歩くベアトリーチエだったが、不意に笑みを深くして黄金の煙管でポンポンと手を叩

く。

「くつくつく……どうしたどうした裏切りの大魔女殿よ。随分と苦戦しているようではないか？　あまりに無様な姿を晒して魔女全体の品位を貶めるのはやめていただきたいものだ……む？　莊子が助けに行ったか、物好きな事よ。弱者は淘汰されるがこの世の定めであろくに」

莊子が動いた事にやや不快感を抱いたベアトリーチェだったが、まあ良いかと考え直す。

自分とは違い、ルールや規則といったものにまるで縛られていない彼の生き方は、それなりに興味深い物ではあるのだから……。

第五話 九州征伐 前編（後書き）

うつん。あんまり爽快感のある無双が出来なかった。今後の課題です。

さて、次はメディア編です。

……フラグを立ててやる！

第六話 九州征伐 後編（前書き）

うん、何かネギまと関係なさそうな話が続く。
早く原作に入りたい。

第六話 九州征伐 後編

メディア side

慢心はなかった。

だが、心の何処かに油断があった。

ゆえにメディアは現在苦境に立たされている。

「くっ……」

片腕から血を流すメディアは、とある山奥で無数の敵に囲まれ、唇をかみしめた。

メディアが超から命ぜられたのは、関西呪術協会から派遣されてきている陰陽師達を九州から叩きだすことであつた。殲滅、ではない。殲滅してしまつては後々、関西呪術協会との間に大きなしこりを残すこととなる。

可能な限り敵に致命傷を与えることなく九州から追い出す……その為メディアは自身が得意とする大規模魔術による掃討といった手段が取れず、ちまちまと敵の反撃能力を削いでいたのだが……。

「思っていた以上に敵の数が多いわね……」

超の事前調査では、九州の地にいる関西呪術協会の戦力は百人程度で、そのほとんどは陰陽師であるという話だつた。だが実際には陰

陽師と共に行動する神鳴流剣士の数が予想より遙かに多く、敵の総数は百五十を超え、開戦から一時間が経過した今もなお百人以上の敵が戦闘継続可能状態にある。

「……あの中華娘には後でゆっくり折檻してあげるわ」

メディアが怒りのあまり無気味な笑みを浮かべるが、神鳴流の情報に関する過ちは、実は超の調査ミスとは言えない。後にサムライマスターとして魔法世界で名を馳せる神鳴流の強力な使い手青山詠春が京都を離れている上、大戦における影響で関東との小競り合いが激化している為、京都神鳴流の長老達はある程度の実力者を九州や四国といった地方から京都に戻し、防備を固める事に専念していたのだ。

その為、九州地方の神鳴流の使い手はその数を極端に減らしていた。ただ、超達が九州征伐を決定し、事前調査を終えた直後、九州に残っていた陰陽師の一部と中国系魔法使い組織とがぶつかり合う事態が生じ、急遽、神鳴流の一団が京都から派遣されることになったのだ。

ぶつかり合い自体は小規模なもので、すぐに話し合いで決着がつき、神鳴流の使い手たちも「やれやれ、明日には京都に戻れそうだ」と肩を竦めていたまさにその時、メディアが襲撃をかけたのだ。

ある意味これは、どちらにとっても不幸なアクシデントではあった。

「……本当にやっかいね。剣士という輩は」

開戦当初、メディアはかなりの数の骸骨兵を前衛として召喚してい

たのだが、元より人ならざる者との戦闘に特化した神鳴流剣士達にとってにはさしたる敵にならず、圧倒いう間に撃破されてしまった。

そして、勢いに乗った神鳴流剣士達の猛攻と陰陽師による的確な援護により、メディアは反撃の手数を徐々に減らしていく。圧倒的なまでの劣勢だ。

これは何も、メディアが超に呼び出された四体の英霊の中で弱かった……というわけではない。どちらかと言うと、相性の問題である。彼女が最も得意とするのは自ら陣地を構えた上での防衛戦や、中、遠距離からの大規模魔術による殲滅戦だ。

神鳴流剣士に間合いを詰められた時点でメディアが撤退なり、超達への援軍要請なりをしていれば、話は変わったのだろうが、それはメディアの矜持が許さなかった。

英霊たる自分が、たかが人間に後れを取るわけにはいかない……。

『この世界の人間を侮るのは駄目ヨ。彼らの中で英雄と呼ばれるような実力者は英霊と遜色無い力を持っているネ。それに、ただの魔法使いも数が揃えば十分な脅威となるはずヨ』

出かけ際に超が口にした忠告も、メディアが嫌っている同僚ベアトリーチェの憎々しい笑みを思い出すと吹き飛んでしまった。あの女に侮られるような真似だけはしたくないと、妙な敵愾心が心を満たすのだ。

「いい加減に消し飛びなさい!!」

ベアトリーチェへの敵愾心がつい、メディアに手加減を忘れさせた。

ゴウッ！！

「ぎゃああああああっ！！」「くっ逃げ——」「う、う、うわああああっ！」

暴力的な豪風が、周囲一帯を薙ぎ払い、関西呪術協会の戦力を急速に削っていった。

（……不味いわね。今ので何人が殺してしまったかしら？）

暴風により舞い上がった土煙により視界が悪くなる中、メディアは舌打ちをする。

殺し過ぎては例え自分が戦いに勝利しても、任務を達成したとは言えない。

そんな考えが頭をよぎり、周囲への警戒よりも敵の損害状況に気を取られた結果——

「もらったぞ！ 西洋の魔女め！」

「——ッ」

——取り返しのつかない隙を、突かれてしまった！

豪風を耐えきった神鳴流の使い手が土煙を掻い潜り、メディアをへとその刃を振るってきたのだ。

「斬岩剣！！！」

メディアは咄嗟に魔法障壁を展開するが、気を纏った敵の斬撃は幾らかその威力を減衰しつつもメディアの魔法障壁を突破して見せた。
ザクッ——ボトッ。

「ぐっ……！」

身体を捻り、致命傷こそ避けたが右腕の肘から先を切り落とされた。敵の第二撃はかるうじて避けれたが、フードとローブが斬られ、メディアの素顔と肩から右胸にかけて白い素肌があらわになる。

痛みに耐えながらメディアは後退しつつ、残った左腕から雷光を迸らせる。

その一撃を受けた剣士はその場で悲鳴もあげずに倒れ伏す。間違はなく死んだだろうが、今はそれを気にしている余裕はない。

「何とか血を止めないとまずいわね……」

英霊は限りなく無敵に近い強者ではあるが、不死ではない。一定以上のダメージを受ければ肉体を現世に保てなくなり、英霊の座に戻る事となる。

すぐにも治癒魔法を唱えようとしたメディアだったが、その口から漏れたのは呪文ではなく、絶望に似た吐息だった。

土煙が晴れた先に、未だ数多く残る敵の姿を見てしまったのだ。

大半はメディア同様に何処かしら負傷しているが、後方にいたらしき数名は無傷だ。

さらに生き残っていた陰陽師が十体ほどの鬼を新たに召喚する。

（治癒呪文を唱える余裕は無し…… かと云って、戦闘が長引けば失血死。作戦を無視して敵の損害に構わず全力で屠れば……）

もはやそれしかないと覚悟を決め、メディアはある魔術を行使する。複数の対象の命を急激に蝕む、呪法的一种だ。これならば、下手な土埃もたたず、戦果を容易に確認できる。

……しかし、この判断は誤りであった。

「こ。これは呪術か！ ならば！」

呪いに関しては陰陽師も専門家であり、ある程度の防御策はある。

ゆえに、前衛の剣士達がバタバタと倒れていく中、数名の陰陽師だけはその攻撃に耐えきって見せたのだ。

そして、未だ呪法に専念するメディアへと自分が召喚した鬼をけしかける。

「グオオアアアアアアアッ」

山を震わせる咆哮と共に、一匹の鬼が矢を放つ。

唯の矢ではない。陰陽師特性の破魔矢だ。

「——ッ、障壁！」

メディアは物理障壁を張るが、破魔矢を易々とそれを貫き、彼女の左腕を背後の木に縫い付けた。

「こ、この程度で私が……っ、まさか!？」

メディアの全身から力が抜ける。

正確に言うと、体内の魔力が破魔矢の力で霧散して行っているのだ。

これではまともな魔法など使えはしない。

ここに勝負は決したといっても良いだろう。

そう、これがただの『勝負』ならば、だ。

そして、残念ながら今行われているのは『戦争』であった。

しかも、敗者が一方的に仕掛けた『戦争』である。^{メディア}

「へ、へへへ、やったぞ」

「おい。生きている連中を回復させろ、あの糞魔女に思い知らせてやろうぜ」

この後の展開など容易に想像がつく。

重傷者を治癒結界に放り込み、軽傷者を回復させた後、生き残った

三十名前後の敵は、木に縫い付けられたメディアを取り囲むと下卑た笑みを浮かべる。

「おいおい、良く見りゃあすげえ上玉じゃねえか」

「本当だ。こいつは朝までたっぷり楽しめそうだぜ」

「乳なんか出して、俺達を誘ってんのか？」

「げははははっ！！」

これは何も特別関西呪術協会のモラルが低いわけではなかった。生死を賭けた戦闘直後の人間の心理なんてものは大抵暴力的で粗野なものなのだ。

関西呪術協会のメンバーの中には当然女陰陽師や、女剣士もいたが、彼女達もメディアを助けようなどとは思わない。中には先ほどの戦闘で兄弟や恋人を殺された者もいるのだ。むしろいい気味だと思い、男達をけしかけたりもした。

皆、後々冷静になれば自分達の行いを恥じる事もあるが、今現在はまったくもって歯止めが効かない状態であった。

一方、今にも凌辱されかけんとしているメディアはというと、

（……無様だわ）

抵抗する気概も持てず、

（もっとも、私にはお似合いの結末かもしれないわね）

自虐に走っていた。

昔からメディアは散々な人生を送って来た。

生前は女神の意向により、ろくに知りもしなかった王子に心を奪われ、母国を裏切り国の宝を盗む手助けをし、弟をその手にかけて追手を足止めするために遺体を海にばら撒き——拳句の果てにその王子に裏切られた。

英霊になってからも碌な事は無かった。常に世界や人類の都合で争いの中に放り出され、後始末をやらされ続けるか、ただただ何も無い空間で永劫の眠りにつく毎日。

自由意思を持った状態で召喚されてみれば、何やら鼻につく魔女がいたり、正体不明の仮面男がいたり、拳句の果てに……あのセクハラ男だ。ついていないにもほどがある。

(……あいつらは無事かしら?)

不意にそんな事を思った。

そして、驚く。自分にも仲間意識などという物があつたのか、と。

(まあ、何だかんだ言って、私も楽しんでいたのかもしれないわね。あの馬鹿な連中とお茶会を)

ふふつと自然と笑みがこぼれる。

それを見た馬鹿な男どもが「観念しやがったぜ」とか言って、近づ

いてくる。

ほどなくメディアは奴らに慰み者にされるだろう。

だが、最初の一人は覚悟するが良い、その喉元には牙で喰らいつき、両の瞳には指を突き立てたやる、とメディアは瞳を暗い輝きで満たす。

一歩。

また一歩と距離が縮まる。

（出来る事なら、もう一度）

あの五人で、冷めた紅茶を啜ってみたかった。

そう――

メディアが――

願い――

瞳を――

閉じた――

瞬間――

「間一髪とはまさにこの事じゃのう」

どこかで聞いたような声が、耳を打った。

（まさか、そんな、ありえないわ……）

メディアの人生はあらゆる意味で裏切りに満ち、悲劇で溢れかえっていた。

だからこそ、否定する。

だからこそ、信じない。

だからこそ、閉じた瞳は決して開かない。

（ピンチになった時に、誰かが駆けつけて、颯爽と助けてくれる……
…そんな英雄譚に相応しい出来事が『私の人生』で起こりうるはず

はないわ。だから、そう、さっきのは――)

幻聴。

そう、メディアは片づけようとするが……失敗に終わる。

「ほっほっほ……乙女の『ピンチ』に駆け付けるとか、ワシ、『ひろー』やりすぎじゃね?」「」

あまりに空気を読まない、馬鹿らし過ぎる発言。

横文字関係の適当な発音。

張りがある声色なのに、口調は爺。

そして何より……すぐ傍から感じる、絶対的な安心感。

(でも……これは……やっぱり……)

おずおずと、メディアは眼を開く。

まず目に入っただのは先ほど自分を襲おうと近づいてきていた男が地に倒れ伏している姿。

次に目に入っただのは、倒れ伏す男を踏みつける、道士服の男の後ろ姿。

最後に目に入っただのは――

「これはもう、あれじゃろ。ワシ、お主の攻略『ふらぐ』立てまくりじゃろ」

——そう言って振り返る男の、邪気一つない笑顔だった。

莊子 side

メディアの瞳から大粒の涙がぼたと溢れだすのを確認した莊子は、前へと向きなおる。

彼女の涙がいかなる理由で流されているのか、莊子には察しがつかなかったが、他者がじろじろ見ていい類の物で無い事は容易に理解が出来た。

ゆえに、自分は今自分のやるべき事をやろうと、眼前の敵に殺気を飛ばす。

「西洋魔法使いの仲間か？」

道士服を着ている為にメディアの仲間かどうか判断がつかなかった

らしい。

剣士らしき男の問いに、莊子ははっきりと頷く。

それを確認した剣士や陰陽師達数十人が戦闘態勢をとるが、莊子は特に構えたりしない。

ただ、懷から一冊の書を取り出す。

「こちらから仕掛けた戦じゃしのう。メディア嬢が負けたからといって、ワシはお主らにああだこうだ言うつもりはない」

「……？」

「ここは命のやり取りの場じゃあ。異性への暴行も、善だ悪だと批判する気にもなれん……」

「貴様、何が言いたい？」

「じゃが、じゃがのう」

取り出した書物を握る莊子の手に、ギリッと力が入る。

「仲間をやられて平然としておれるほど、ワシは人間が出来ておらんのだじゃー!!」

バツと書を開き、その書の名を——『宝具』の『真名』を解放する！

「己が欲望を解き放ちたいなら、まずワシの一撃を受けて生き残って見せるがよい！ 東の果ての島に住まう蛮族どもよ！！ さあ、その真価を今ここに顕現せよ『太平要術の書』よ！！」

そこからは、ワンサイドゲーム 莊子による一方的虐殺だった。

真名解放と同時に、宝具『太平要術の書』はその力をいかなく発揮する。

神鳴流剣士は『突如として』ひび割れた大地に吸い込まれ、

陰陽師達は『不意に』現れた竜巻に次々に呑み込まれていき、

召喚された鬼達は、『急速に』現れた雨雲から放たれる無数の落雷にその身を貫かれていく。

「な、なな、何が起こっているんだ!？」

西洋魔法でもなく、東洋魔法でもない。

何の予兆も無く自らを襲った天変地異に、為す術もなく数を減らしていく関西呪術協会。

「ひ、ひいつ逃げ——」

その場から遁走を試みた者達もいたが、駆け出した先で『不自然なタイミングで』起こった土砂崩れに巻き込まれて生き埋めとなる。

「く、何をやったのかは知らんが術者を倒せば——」

反撃を決意する者は『例外なく』木の根に足を取られ『不運な事に』倒れた先にあるとがった岩にその身を打ちつけてしまう。

「ほっほっほ……ただの人なる身で、自然と戦うのは辛かるう。無駄に鍛えておる分、簡単には死にきれないのが余計に、のう……ほっほっほ」

戦場には、莊子の嘲笑と、獲物達の悲鳴、そして大自然の咆哮が響き渡り続けた……。

戦いという名の蹂躪が終わったのは、莊子が宝具を発動させてから僅か一分と少しの後の事だった。

自分とメディア以外に動く者のいなくなった戦場で、莊子は宝具をしまう。

もはや戦闘以前の原形をとどめぬ、死屍累々といった周囲の様相に、困ったように頬を掻く。

「……ちとやり過ぎたか？ こ奴らは下手に死人を出すとまずいと超嬢が言っておった気もするが……まあ、構わんじやろ」

仲間の為じゃし、と結論付けた莊子は、肝心のその仲間が未だに木に縫い付けられたままなのを思い出した。すぐに駆け寄って、メディアの手を木に縫い止める矢に手をかける。

「少し痛むじやろうが我慢せいよ……ふんっ」

「ッ！！」

一気に矢を引き抜くと、メディアは激痛を噛み殺す。

傷口からはさして血が出ない………既に、右腕から大量の血を失っているからだろう。

メディアのただでさえ白い肌が、余計に青白く見えた。

「これは……まずいのっ……」

「……ええ、血を流し過ぎたわ。そこに落ちてる私の腕、取ってくれないかしら」

「これかのう？」

「それよ。ありがとう」

そう言つて、メディアは自分に治癒魔術をかけ始めた。斬り飛ばされた腕は瞬く間に繋がり、矢で貫かれた手もその傷口を消す。

だが、メディアの顔色は一向に良くならず、今にも倒れそうだ。

いや、実際に無理に歩こうとして、倒れた。

「ほっ、あまり無理をせんほうが良いぞ」

慌てて荘子が抱き起そうとするが、メディアは煩わしそうに、

「……別に、無理なんかしていないわ」

そう言つて、荘子の腕を払いのけようとする。

払いのけようとしたものの、やはり肉体に力は戻っておらず、それは失敗し、結局は荘子に抱き起された。

「……やれやれじゃのう」

「くっ、放しなさい、荘子。私は大丈夫——」

あくまで一人で立ち上がろうとするメディアの額を、莊子は軽くこづく。

そして、ゆつくりとその場に横たえさせ、頭を正座した自分の膝の上に乗せる。

所謂男女逆の膝枕だ。

そのまま、メディアの額に自分の右手を置く。

「動くでないぞ」

「っ、何をする気なの」

「ん？ 房中術の一種じゃ」

「なっ!？」

「勘違いするでない。やらしい事なぞせんわ。ただワシの陽の気とお主の陰の気を反応させて、互いの体調を整えるだけじゃ」

「……嘘じゃないわよね」

「ほっほっほ。メディア嬢の身体を思うままに触りまくりたいという欲求はあるが、ワシとて場はわきまえとるよ。触るのはおでこだけじゃ」

納得したのか、ただ何を言っても無駄だと諦めたのか、メディアは黙って莊子に身を委ねた。

莊子の手から金色の光が漏れ、メディアの額に染み込んで行く。

その感覚は、気持ち良いというより、心地良い。

かすかにではあるが、メディアの血色が良くなった。

「……メディア嬢よ」

「……何かしら？」

「信用できんか？」

何が、とはメディアは問い返さない。

ただ、顔を背ける。

「ワシはのう……」

莊子は、そんなメディアを悲しそうな瞳で見つめて言う。

「西洋の歴史には詳しくもない。じゃからお主がどのような人生を歩んできたのかも知らぬ。ゆえに、人をもっと信じるとか、ワシらは裏切らんなどと、軽々しくはいわん」

「……」

「じゃが、お主が今のままでおるのは、ちと寂しい」

「……ッ」

金色に光る手で、震えるメディアの髪を撫でる。

「ゆっくり、そう、ゆっくりとな……やっていこうではないか？」

髪を撫でるのを止めた荘子は、再び手をメディアの額に戻す。

メディアは急激な眠気に誘われた。

「今は、ただゆっくり休みなさい」

おそらく荘子が何かしたのだろうと思ったが、メディアは抗う事無くその眠気を受け入れる。

徐々に下がる瞼。

完全にそれが下がり切る前に、ただ、一言メディアは口にする。

「……悪くないわ」

それが今の状況を評しているのか、それとも先ほどの提案に対する答えなのか、荘子は知らない。

だが、

「ほっほっほ、それは良かった」

いつもの間抜けな笑い漏らす。

陽が昇るまで、後一時間。

莊子はそれまでただ、ただ、見守り続けた。

己の膝の上で、幼子のごとき安らかな寝顔を見せる、か弱き一人の王女を――。

第六話 九州征伐 後編（後書き）

うん、難しい。

メディアさんをデレさせるの難し過ぎ。

どうやれば自然にデレた感が出るのか、要研究。

次回は、九州を統べる魔法組織としての活動記録的な事をします。
原作突入には、あと三話か四話は最低挟みます。

主人公以外の登場人物紹介（前書き）

というわけで、莊子以外の四人を軽く紹介。

主人公以外の登場人物紹介

超 鈴音

【ステータス】筋力D 耐久E 敏捷D 魔力B 幸運D 宝具C
(転移装置等)

【解説】

言わずと知れた原作キャラ。

ただし、原作で未来に戻った後、再度過去へとやって来た大人版である。

所謂出戻りの出戻り。

戦闘能力は英霊と比べれば見劣りするが、原作時の超^{カシオペアあり}よりは幾らか強い設定(未来に戻った際いろいろ努力した)。

ネギ坊主が活躍しない魔法世界の救済を目指している。

主人公莊子に対する感情は、良くも悪くも『率先して協力してくれるサーヴァント』でしかないが、頼りになる存在である事は認めている。

莊子達と魔法組織『不完全なる翼』を設立後は、その運営を技術的な面で支えている。また、表向きの顔として『キャスターグループ』の会長つき主席秘書でもある。

紫の魔女

【CLASS】キャスター

【マスター】超 鈴音

【真名】メディア

【性別】女

【属性】中立・悪

【ステータス】筋力E 耐久D 敏捷C 魔力A+ 幸運B 宝具C

【クラス別スキル】

陣地作成：A

魔術師として有利な陣地を作り上げる技能。“工房”を越える“神殿”を形成することが可能である。

道具作成：A

魔力を帯びた道具を作成できる。擬似的だが不死を可能にする薬を作ることできる。

【固有スキル】

高速神言：A

神代の言葉を用いて、呪文・魔術回路を使用せずに術を発動させることが出来る。

極めて便利な技能だが、神代の言葉であるために現代の人間には発

音できない。

金羊の皮：EX

かなり高価らしい。竜種を召喚できるらしいが、キャスターには幻獣召喚技能がないため使用無効。

原作では無意味だが、今回は召喚能力のある御方が仲間にいる……けど……。

【宝具】

『破戒すべき全ての符』
ルールブレイカー

あらゆる魔術による生成物を初期化する短剣である対魔術宝具。

【解説】

言わずと知れたFateの紫の魔女さん。通称キャス子さん。

原作でも今作でも設定上はかなり不幸なお人。

原作では葛木宗一郎がいた為まだ報われていたが……今作の主人公
莊子は……うん、本当に何でキャスさんはステータスの幸運がB
もあるのか何故である。

超の計画に協力はしているが、特に積極的に行動しているわけではない。頼まれれば何かする、程度である。

魔法組織『不完全なる翼』では、超が麻帆良等と直接かわれない
為にトップ（代理）となっており、表向きの組織『キャスターグループ』では会長職にあり、莊子とは夫婦の振りをしている。無論夫婦役に関しては不満。

黄金の魔女

【CLASS】ウィッチ 魔女

【マスター】超 鈴音

【真名】ベアトリーチエ

【性別】女

【属性】秩序・悪

【ステータス】筋力E 耐久C 敏捷D 魔力A+ 幸運C 宝具A

【クラス別スキル】

陣地作成：D

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。
”結界”の形成が可能。

道具作成：E

魔術的な道具を作成する技能。

【固有スキル】

召喚：A

自身が被召喚者でありながら、召喚能力を有する。

家具は勿論のこと、かなり高位の悪魔ですら召喚可能であり、触媒さえあれば理論上召喚不可能なものは無いとされる。

黄金律：A+

身体の黄金比ではなく、人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。

大富豪でもやっていける金ピカぶり。一生金には困らない。

と言うより、彼女がお金に困る姿が想像できない……。

カリスマ：C

軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において、自軍の能力を向上させる。

カリスマは稀有な才能で、小国の王としてはCランクで十分と言える。

無限の魔女：A

魔法の存在を知る者に対して、絶対的に優位な立場にいる事が可能。ただし、その存在を否定する者に対しては、著しく能力を減衰する。

【宝具】

『煉獄の七姉妹』

ランク：C 種別：対人宝具 レンジ0～10 最大補足7人
ベアトリーチェの上級家具。

彼女が指定した対象部位を射抜くか宝具自体が破壊されるまで、その動きが止まる事は無い。

ただし、七つの大罪を何一つ犯していない清廉潔白な者や魔法の存在を完全に否定する者には無効である。

『うみねこのなく頃に』

ランク：A 種別：固有結界・対軍宝具 レンジ0～10 最大補足18人

この結界内に引き込まれたが最後、惨劇は回避不可能である。詳しい能力は……生き残った者の証言が曖昧で、不明。

【解説】

言わずと知れた、うみねこの黄金の魔女さん。愛称ベアト。敵に回してはいけない人ランキングでは、キャス子さんより上位に

位置していると思われる。

原作よりは幾らか丸い性格をしているように見えるが、それはあくまで超達を自身と同格の英霊やマスターであると認めているからであり、他の存在に対してはむしろ原作よりも冷酷。

超の計画は千年の退屈を紛らわさせるための余興としか思っており、成功しても失敗しても、どちらでも構わないと考えている。

『不完全なる翼』と『キャスターグループ』両方の金銭管理を任されている……自称顧問錬金術師。

主人公である莊子に対しての感情は、恋愛というより好奇心に近い。1986年のとある時期以降、その能力を増幅させるが、同時に何かしらの悩みを抱えることとなる。

クラウン

色々謎な仮面の男。

超の計画に対しては、積極的に協力している。

宝具を用いない純粹な戦闘力では、他のサーヴァントよりも上らしい。

第七話 メディアさんの業務日誌（前書き）

今回は淡々と業務報告……という名のメディアさんの愚痴です。

第七話 メディアさんの業務日誌

メディア業務日誌 side

1982年、○月×日

九州征伐の翌日、私達は日本に居を構える全魔法組織に向けて宣言したわ。

「九州は我ら『不完全なる翼』が掌握した」と。

『不完全なる翼』という組織名の由来は大体想像がつくでしょう？

魔法世界にその名を轟かす組織『紅き翼』と『完全なる世界』の名を、あの中華娘が堂々とパクツたのよ。最初はそのまま『完全なる翼』にしようとしていたのだけど、セクハラ男が「ワシらはもうちょい歪じやろ」とか文句をつけた為に「不」の一字が追加された。「不」という一字を提案したのがいけすかない黄金の魔女だったのが癢ではあるが、確かに私達にはそちらの方がお似合いね。

ちなみに組織としての長は私に決まったわ。

本来なら中華娘がその座に就くべきではあるのだけど、彼女は諸事情によりその存在や顔を関東や関西の長に知られるわけにはいかないので、私がその身代わりに立つことになったのだ。まあ、セクハラ男や唯我独尊魔女、意味不明な仮面男に任せるわけにもいかないもので、仕方のない人選ではあるわ。

ついでに、私達は対外的に使う名前や、私達以外の人間がいる際に用いる呼び名を「キャスター」や「ウィッチ」「マスター」といった風なクラス名に決めた。

これは私達の正体が過去の英雄である事を隠す為である。

同年同月 日

九州征伐から数日が経ったある日、かつてこの地にて覇権を争っていた中国系魔法組織が『不完全なる翼』の傘下に加わる事を承諾してきた。

私達が九州掌握を宣言した当初は、彼らも他の組織同様私達の存在を認めようとはしていなかったが、こちらの幹部であるセクハラ男や中華娘の出自が自分達の母国である事を知るとやや態度を軟化させた。同族意識が強いらしい。

さらに、セクハラ男が仙人である事に相手組織の一人が気付くと、今までの態度を一変させ、あの変態に対して崇拜とも憧憬ともとれる感情を抱くようになり、ついには『不完全なる翼』との合流を決めたのだ。

傘下に加わった者達に話を聞いてみた所、彼らの母国において、仙人というのはそれだけ価値ある高貴な存在らしい。

……私にはまったく理解できないわ……あの変態とすれ違ったびに
伏礼する連中の考えが。

まあ、彼らの合流により、ある程度の人員と、彼らの組織が所有していた経済基盤を獲得できたのは僥倖に違いないので、良しとするわ。

1983年 月□日

中華娘が表の組織として、接收した中華街の飲食店などを元に『キヤスターグループ』を設立。当然その会長は私。また、面倒事を押し付けられたわ……。

しかも「表組織のトップが独身では収まりが悪いネ」とかふざけた理由であるセクハラ男が私の夫役として抜擢されるなんて……悪夢だわ。調子に乗って寝室に忍び込んできた種馬を次元の狭間に閉じ込めかけたが、私は勿論悪くない。

同年の年末辺り

『キャスターグループ』の事業の根幹は飲食店関係だけど、その枝葉は多岐にわたる。

物流や通信、医療関連にも手を出しているし、孤児院の運営といった慈善事業にも積極的だ。中華娘いわく、全ては未来に対する布石らしい。

そう言えば最近その中華娘が株に手を出し始めた。インターネットとやらが普及するまでは小規模の取引で我慢するらしいが、儲けは確実に出している。どうにも、何処の株価がどの時期に上下するかを完璧に把握しているらしい。

「ふふふ、未来知識の有効活用、これぞ内政チートの醍醐味ネ！」
等と良く分からない事を口走っていたが、まあ放っておく事にするわ。

翌年の年末辺り

中華娘が床に突っ伏して号泣していた。

「天然チートとか反則過ぎヨー！」

いけすかないあの魔女が、日本に観光に来ていた何処ぞの石油王に見初められ、小さな油田を一つポンとプレゼントされたのが原因ら

しい。中華娘が一年かけて必死に出した儲けの数百倍の価値があるプレゼントだ。ある意味当然の反応である。

「くつくつく……妾の美貌ならば当然のこと」とかほざきながら胸をそらす魔女に軽く殺意を抱いたのは私だけではないはずよ。

1986年半ば

表の事業は軌道に乗り、国内でも有数の優良企業に成長したわ。中華娘の企業買収が成功を続けているのと、退屈を持てあました陰険魔女が海外旅行に行くたびにその土地の富豪から何かしらの贈り物を貰ってきているのが大きな要因ね。

……月の土地や、欧州の某国家の爵位何て貰ってどうするのかしら？

それに比例するように、裏の組織も大分形が整えられてきたようね。

こちらは基本的にセクハラと仮面に丸投げしておいたので不安だったのだけど、案外上手くいった。

セクハラ男は普段の態度こそ人を舐め切っているが、こと人材の育成や教育といった事に関しては一切手を抜かない。

私も組織の長として一度視察に赴いたのだけど……あれは特訓というより拷問に近く、鍛練と呼ぶより改造と呼ぶべきで、訓示と称しては洗脳まがいの演説を繰り返していた。

そのため、かつて彼に惨敗した中国系魔法使い達の実力はメキメキ上がり、優秀な者たちは既に準英雄格と呼んで差し支えない腕前になった。

「……やべ、ワシちよつとやりすぎちゃったかも。どうしょ……」とかセクハラが冷や汗を流していたのは私の見間違いであろう……見間違いであつて欲しい。

仮面男には魔法組織としての防衛任務についてもらった。要は敵魔法組織の侵攻や潜入を阻み、自然発生した鬼や悪魔の討伐である。

魔法世界における大戦が終結し、ある程度余裕を取り戻したらしい関東や関西の馬鹿者どもがちょっかいをかけてきた際は、セクハラに魔改造された数名の部下を率いて戦ってもらったのだけど……

「……俺の出番が無かった」

……という報告を聞いた時は、私も思わず顔を引き攣らせたわ。

何で百人単位の敵侵攻勢力を英霊の力も借りず数名のただの魔法使いで叩きのめせるのよ……中華娘が何処かたそがれた瞳で「チート軍の完成ネ……」とか呟いていたのが妙に印象に残ってるわ。

1986年年末

関東からは同盟、関西からは不可侵条約を結ぶ使者が来た。

無論門前払いなど食らわさず、ちゃんと話は聞いてあげたわ。

……話を聞いた瞬間両方とも叩き出したけど。

だって、関東はあり得ないほどの上から目線で、関西は哀れな被害者面なのよ。軽く殺意がわいたわ。

本国の元老院を怒らせると偉大なる魔法使い達の手によって私達は一捻りですって？

『紅い翼』が元老院を嫌っている事を私達が知らないとも思っているのかしら？

彼ら抜きに、相手の力量も読めない何ちゃって英雄たちくらい瞬殺してあげるわ。

1982年の私達の侵攻により命を落とした者たちの遺族への謝罪と賠償？

あの戦いにおいて先に手を出したのは関西なのに、謝罪？（私が手を出すよう仕向けたのは事実だが、元から他の勢力と小競り合いばかりやっていたくせに、一方的な被害者の振りは腹が立つわ）

私達が勝者なのに、賠償？（普通何かを求めるなら勝者の側よね）

しかも、数ヶ月前のそちらの侵攻に対する弁解すらまだ聞いていないこの状況で？

……こちらのNOという返答を戻って来た使者から聞いたサムライマスターさんは狼狽したらしい。断られるなんて思ってもいなかったそうだ。何たる楽観的思考。どうやら彼には政治家としての資質が致命的なまでに欠けているようだ。

1987年

関東と関西が先の使者に対する無礼を抗議。

無視したら、『一部の過激派』なる連中が『組織の決定を待たずに暴走』したらしいので、九州にて彼らの代わりに肅清してあげたのだが……何故かさらに抗議を受けたわ。

配下の手綱も握れない連中が良く吠えるわ。

あら、私達は大丈夫よ。セクハラのせんの……ではなく、教育が行き届いているから。

1988年

順調に成長を続けていた『キャスターグループ』の業績が『雪広財閥』を追いぬく。総資産ではとくに追い抜いていたのだが、これはこれで組織の長として嬉しい。

『不完全なる翼』の名が、狭い範囲ではあるが魔法世界でも知られるようになる。どちらかというと『悪名』ではあるが、無名の弱小組織扱いされるよりはましね。

あと、中華娘が言うにはそろそろ2・Aメンバーが全員この世に生を受けた事になるとか。まあ、そちらはさしあたって関係ないわね。

彼女の計画では、野菜君が日本に来るまで彼女達には干渉しないらしいから……放っておいても大丈夫。

……そんな事を思っていた時期が私にもあったわ。

物語の流れを変えたのは、セクハラ男こと、莊子であった。

第七話 メディアさんの業務日誌（後書き）

莊子が何をしでかしたのか……次回、すぐにそれが判明します。

第八話 何たる原作ブレイク（前書き）

うはは、やってもうた。

原作突入前の原作ブレイク。

第八話 何たる原作ブレイク

超 side

それは1992年のとある夕暮れの出来事であつた――

長崎の中華街にある『キャスターグループ』本社の一室で超がふつとため息をつく。別段何か問題ごとが起こつたわけではない。単なる疲労からくるため息だ。

ここ最近、表裏問わず組織の運営は順調そのもの。このままのペースでいけば超達は、ネギ坊主が来日するまでにかなりの力を蓄える事が出来、如何なる組織も自分達を無視できないほどの影響力を持てるだろう。

問題があるとすれば、組織拡大が順調過ぎて超個人への負担の増加がとどまる事を知らない事だ。

本来ならば組織が拡大するとともに、それなりの人材を要職にあててその負担を軽減させるべきなのだろうが、超達は色々と極秘裏に事を運ばなければならないので下手に他人任せにはできない。

「他人でないサーヴァント達とは言えバ……まともな事務処理能力があるのがメディアのみとは予想外だたネ。後の三人は遊ばせている方が邪魔にならなくて良いレベル何て、最悪ヨ」

とある爺口調は書類を見ただけで「あいたたっ、腰が」とほざきながら全力疾走で逃走するし、仮面の男はその存在意義ともいえる仮面の存在が表での仕事を不可能にしている。退屈嫌いに至っては、業務時間内に勝手に社員を集めてお茶会を始めたり、大切な会議をすっばかして旅行に出かけたり……。

紫さんはとても有能なのだが、どちらかというと裏よりの仕事を重視してもらっているので、自然と表の仕事は全て超一人で済ませねばならない。

「……レアアース早期確保を目的とした特別予算の申請……これは許可ネ……社員福祉充実による作業の効率化、こっちはもう少し詳細を煮詰めなきゃ駄目ヨ」

決裁していった書類の山がとうとうその重みでぐらつき始めた時、その書類が目にとまった。

「んんん？ 魔法世界に散在する魔法道具の収集と研究？ これは表ではなくて裏の書類のはずネ。いつの間に紛れ込んだ力？」

こういう事があるから自分以外に仕事を振り分けられないのだと、超は頭を抱えたが、そろそろ一休み入れるには良い頃合いだったのでこの書類を『不完全なる翼』の本部に届けがてら息抜きをすることにした。

本社ビルを抜け出て、すぐ近くにある純中華風の屋敷へと散歩気分
で赴く。

「これはこれはマスター様。キャスター様にご用事ですか？ それともウィザード様に？」

玄関口で超に声をかけたのは、元中国系魔法使いの一人で現在は『不完全なる翼』の本部警備をしている道士だ。彼らには超達の本名を教えていないので『超』マスター』『莊子』ウィザード』『メデイア』キャスター』『ベアトリーチェ』ウィッチ』と呼ぶ。クラウンはそのまま。

もつとも全員に名を秘すとそれはそれで問題なので、幹部クラスには超達の本当の目的は黙ったまま名前だけは教えている。

これにより『不完全なる翼』では、幹部入りしてようやく本当の仲間として扱ってもらえるのだという認識が広まり、下っ端達がより一層努力する結果となったのだが、これは余談である。

「キャスターに書類を渡しに来たのだヨ。何処にいるカナ？」

「キャスター様は現在執務室におられるはずです」

「他の三人ハ？」

「クラウン様は一個小隊を率いて九州全域の警邏に赴かれており、帰りは深夜を過ぎることです。ウィッチ様は……その……オーロラが見たいとか……。ウィザード様はこの間ウィッチ様がお連れになった少女と中庭にて鍛錬行われております」

「ん？」と超は首を捻る。

「ウィッチが連れてきた少女？」

「はい、何でも旅先で出会い、体内に保有している気の量が常人よりも遥かに多い為、鍛えれば役立つだろうとウィザード様にお預けになられたのです」

その話を超は二人から聞いていなかったが、この段階では特に気に留めなかった。

退屈しのぎに世界を放浪すウィッチに、超は魔力や気に関する才能を持つ者がいたらスカウトしてくるようにつていたので、ウィッチはちゃんと言いつけを守っているのだと安心したくらいだ。

警備の道士へ別れを告げて屋敷に入り、メディアの執務室を目指す。

問題が発生……否、発覚したのはその途中の事だった。

屋敷を繋ぐ渡り廊下に差し掛かった折、中庭から楽しげな声が聞こえ、ついそちらに視線を向ける。

「おや？ あれは荘子ではないか？ では傍にいる少女……と言うより幼女が例の――」

そこまで口にして、超は絶句した。

その理由？

別に荘子が幼女にいかがわしい事をしていたわけではない。

二人はただ気を用いて破砕したであろう岩の残骸を指差しながら、
会話しているだけだ。

この屋敷では、特筆する必要もない極日常の鍛錬風景。

ならば、何故、超が絶句したのか？

その理由はただ一つ。

楽しげに笑う少女の背中から――

——真つ白な翼が生えていたからである。

「ほっほっほ。見事見事。やはりお主にはかなりの才能があるぞ、刹那嬢よ」

「ならウチここにおってもええの？ 里のみんなみたいに追い出したりせえへん？」

「ほほっ、せえへんせえへんよ、そんな事は。お主が居ただけここにおれば良い。それにお主は将来別嬪になりそうじゃしのう」

「で、でもウチの翼白いし」

「ほ？ 白いと何ぞ問題があるのかのう？ ワシは綺麗で羨ましいと思うが？」

「ほ、ほんまに？　ほんまにそう思うん？」

「無論じゃとも。仙人は嘘をつかん。なんなら、将来ワシの嫁にしても——グベハッ！！」

この時点で莊子の側頭部にドロップキックを喰らわせた超の決断は、後世の歴史家も絶賛するほどの英断であつただろう。

莊子 side

（何故にワシは説教されとるんじやろう？）

やっぱり幼女を冗談でも口説くべきではなかったか？

そんな疑問を胸にしながらも、莊子は殊勝な態度で正座を続ける。

場所は中庭。

目の前には怒り心頭の超。

横には、超に怯えた視線を向けながら莊子の服の裾を掴んで離さない幼女——刹那。

莊子はドロップキックを喰らった側頭部を撫でながら首を傾げる。

どうしてこうなった？

超に説明を求めた所、刹那嬢に聞こえぬよう小声で教えられた。

どうやらこの刹那嬢は未来において、ネギ坊主と関わりを持つ重要人物の一人らしい。そんな彼女の人生に現時点で干渉するのは大きな未来改変を引き起こしかねず、超の計画の障害になりかねないのだそう。

「まったく……悲劇回避やトラウマ除去の為の安易な原作介入やブレイクはご都合主義と馬鹿にされる元なのにこのセクハラ爺八……おい、聞いていの力！？ 莊子のせいで未来が原作乖離を起こしかけるヨ！！ どう責任取るつもりネ！！」

「い、いや、刹那嬢を連れてきたのはワシじゃなくてベアトリーチ嬢じゃし、そもそもそういった重要人物の名前は前もって教えておいて欲しかつ」

「言い訳は見苦しいネ！ 莊子みたいな奴が何百年も前に転生して闇の福音を助けたり、アリカ姫を助けたりして原作をあつさり崩壊させてしまうのヨ！！ 無責任過ぎネ！！」

意味が分からん意味が分からんと首を横に振ってみたが、許しはもらえなかった。それどころか激昂した超は莊子の襟首を掴んでガックガック揺さぶる。

このままでは莊子の脊椎が重大なダメージ受けかねない。

そんな状況を打破したのは、荘子の袖を掴んだままの刹那だった。

「うつ……ひぐつ……やっぱ、ウチここにおっいたらあかんの？」

ボロボロと涙をこぼし、グズグズと鼻を鳴らす幼女。

それを前にして言い争いを続けられる者がいようか？

超は決まり悪げに荘子を放し、一步のけぞるようにしてさがった。

これを好機と荘子も動く。

「おおつ、おおつ、泣くでないぞ刹那嬢や。ワシはお主の味方じゃ。お主を絶対に追い出したりはせん。烏族だから、ハーフだから、翼が白いからお主を迫害した者たちとは、ワシは違う」

そう刹那を慰めながらチラ、チラと超を批難するような目で窺う。

超の良心に千のダメージといったところだろう。オーバーキルだ。胸を抑えて超がたじろぐ。

荘子の見立てでは、超とて本心では目の前で泣きじゃくる刹那を助けたいはずである。そんな本心を無視しようとしているのは、あくまで超の知る未来からの乖離を恐れているからに他ならない。

ならば——と荘子は超に刹那保護を納得させる為の段取りを考え出す。

（ふむ……先ほどの、まずは超嬢の『情』に訴えかけた。ならば次は『理』を説き不満を抑え、その後に『利』を教え欲を煽り、最

後にもう一度『情』に訴え躊躇いを捨てさせるとするか(う)

伊達に思想家などはやっていない。人を言いくるめることこそ莊子の本業なのだ。

「超嬢よ。こう言つては何じゃが、もはやワシ達と刹那嬢は出会つてしまつた。これは変えられん事実じゃ。例え刹那嬢の記憶をいじろつと、何かしらの影響は出るじゃろつ」

「そ、それは確かにそうかもしれないネ、しかし」

「だったらいつその事放り出すよりも、手元に置いて、出来得る限り未来に影響のないよう刹那嬢をワシらで動かす方が良いのではないかな？」

「……私達で行動や思想を管理するという事力……それならば確かにある程度融通は利くかもしれないネ……」

超が『理』を認めた事に莊子は満足して頷く。次は『利』だ。

「それに後々ネギ坊主と行動を共にするならば、彼らの情報を内側から流してもらうことも可能になる。そうなれば、ネギ坊主を活躍させる前にワシらが動くことも容易になるであろつよ」

「……」

無言。これは『利』を認めた事に他ならない。止めを刺すのは『情』である。

「ここで放り出せば刹那嬢の心をはさらに傷つくぞ？ 最悪壊れて

人間不信となり、まともな人生など歩めなくなるかもしれない。それでもお主は――」

「ああっもう！ 分かた、分かたヨ！！ 私の負けネ！！ 刹那お嬢ちゃんがここで暮らすのを許すヨ、これで良いカ！？」

こうして、莊子とベアトリーチエが意図せず行ったナチュラル原作ブレイクは、超の容認することとなり――

「よしよし、では刹那嬢よ。ワシの事はこれから『父上』と呼ぶの

じゃぞ」

「はい、父上」

「くつ、萌えるのう。なら、次はさきほどの超嬢の事は『母上』と呼ぶように」

「？ 父上とさっきのおねえさんは『めおと』やったん？」

「まあ似たようなものじゃ。それでな、メディア嬢とベアトリーチ嬢は『愛人さん』と『お妾さん』と呼ぶんじゃぞ。史実的には大體そんな感じじゃしのう」

——純粹な幼子に対するくだらない教育が後に発覚した際、莊子が魔女三人にどういったお仕置きを受けるのかは、別の話である。

第八話 何たる原作ブレイク（後書き）

まあ、一人か二人くらいは原作キャラやネギパーティーからひっこ抜こうと思ってたんですよ。

なるべく理性的で大人の判断が出来るキャラ……つまり龍宮隊長が良かったんですが、彼女がいなくなると少女版超の計画がまずくなるで、刹那にしました。

刹那魔改造の始まりです。

木乃香との関係は原作に近い感じにするつもりですが、全く同じというわけではありません。

第九話 古都で二羽の蝶が舞い踊る 前編（前書き）

ちよつと時間がかかりました。すみません。

第九話 古都で二羽の蝶が舞い踊る 前編

莊子 side

莊子は竹林に挟まれた石段と馬鹿でかい鳥居を前に感嘆の吐息をもらした。

「……噂には聞いておったが、随分立派じゃのう。関西呪術協会とやらは」

刹那を引き取ってから早数年。莊子達『不完全なる翼』は関西呪術協会と停戦協定を結ぶこととなった。だが、あくまで停戦である。友好的な同盟を結ぶわけではない。同盟を結びたいと思えるほど、関西呪術協会は信の置ける相手ではないのだ。

ならば何故停戦をするのかというと、

「ここが、今日からウチが御厄介なる場所なん？ 父上？」

「うむ、交渉次第ではそうなるのう……」

莊子のマスター超の意向により関西呪術協会に刹那を預けて京都神鳴流を学ばせ、呪術協会の長、近衛詠春の娘木乃香と友好関係を結ばせるためだ。

『木乃香と刹那のコンビは外せないヨ！ でないと原作乖離が酷過ぎるネ！』

とは、超の言葉。

ちなみに原作というのは、超がスプリングフィールド教の経典と自身の記憶を元に描いた『ネギま?』という題名の漫画のことである。何故そんなものをわざわざ描いたのかというと、今回の刹那の一件のように莊子達が無自覚の内に『原作キャラ』とやらとの接触をしたり『原作ブレイク』なる行動を取らないように教育するためであったりする。

……超本人の絵が微妙に美化されていたり、胸が今以上に豊かだったりするのは御愛嬌というやつだ。

「ふむ。この京都で妾達が接触の際に注意しておかねばならぬ存在は五人ほか。近衛詠春、近衛木乃香、犬神小太郎、天ヶ崎千草、月詠……面倒よな。皆殺しにしてしまう方が楽ではないのか?」

物騒な事を莊子達の横で口走るベアトリーチェ。

今回の交渉において莊子は『不完全なる翼』が派遣した正使であり、ベアトリーチェは副使という立場である。自分が莊子よりも低い立場にある事を不愉快に思っているらしいベアトリーチェの機嫌は、京都に着く前から低空飛行を続けていた。

ちなみにメディアとクラウンは現在麻帆良学園都市にて関東魔術協会と停戦協定を結ぶ会談にのぞんでいるはずだ。こちらは所謂原作開始時まで放っておいても良いのだが、関西と協定を結んでおきながら関東を無視したとなると、後々災いの種になりかねないので同時攻略という運びになったのだ。

「……ワシらのマスター、超嬢が望むのはあくまで『ネギ・スプリ

ングフィールドが活躍せずとも救われた世界』じゃ。無駄な人死には超嬢の望む所ではない。それに、ネギ坊主の今後とやらの為に極力原作通りに進めて人間的、肉体的成長を促さねばならん……よって原作の登場人物の殺害は禁止じゃ」

人間的、肉体的成長を阻害するとネギ坊主は将来的に『何処か』の『誰か』の思惑で都合の良い『駒』にされかねないらしい。

「……ふう。退屈しのぎも楽ではないな」

気だるげにそう呟くベアトリーチェ。

莊子はそれに苦笑するしかなく、

「……ともかく、まずは会談に赴くのが先じゃ」

小さな刹那の手を取って、石段を登り始めた。

——そして三十分後。

莊子は命の危機に瀕していた。

敵襲ではない。

むしろこれは同士討ちの類である。

「くつくつく……荘子よ。妾の勘違いかな？　この道は先ほど一度……いや、五度は通った覚えがあるのだが？」

「そ、そうじゃのう……」

この世のありとあらゆる負の感情を煮詰めたような空気が、荘子の肺を腐らせる。その空気の発生源が千年を生きる魔女殿である事は容易に察せられたが、残念ながら効果的な対処法は無い。

横並びに石畳の上を歩く二人の間には、両手で二人と手をつなぐ刹那。否、刹那は左横から漂ってくる禍々しき気によって泡を吹いて気を失っているのだ、二人に引き摺られていると言うべきか。

ズリズリズリと力の抜けた刹那の足が、地面にこすれて間抜けな音を立てる。

「……ぶち破つても良いか？」

物凄い晴れやかな笑顔でそう訊かれたが、恐怖に震える首をかるうじて横に振る荘子。

何をぶち破るかなど、訊き返す必要はない。

荘子達を閉じ込め苛立たせている元凶以外には有り得ないのだから。

「まあまあ、少し落ち着くのじゃベアトリーチェ嬢よ。お、あそこにある休憩所でまずは一休みしようではないか」

荘子が指さしたのは、何度か見た自販機もある休憩所であった。

一休みしたいと思っていたのはベアトリーチエも同じだったらしく、フンと鼻を鳴らしただけで大人しくなった。

莊子は休憩所の長椅子に気を失ったままの刹那を横たえさせ、自販機で冷たい紅茶を買いそれをベアトリーチエに差し出す。

安っぽいペットボトルの紅茶に眉をしかめたベアトリーチエだったが、結局文句を言う事は無く、刹那が横になっているのとは別の長椅子に腰かけて喉をうるおし始めた。

莊子とその横に腰をおろすと、ベアトリーチエがタイミングを見計らったかのように声をかけてくる。

「妾達を捕えておる結界が何か分かるか？」

「……ふむう。ワシらを千本鳥居に閉じ込めておるのは無間方処の咒法で間違いないじやろうな。ほれ、超嬢にもらった原作とやらにもあったじやろ、あれじやよ」

「ああ、なるほど。そう言えばあつたな、そんな物が……詳しくは覚えておらんが」

愛らしいと評するべき鼻を鳴らすベアトリーチエに莊子は苦笑を隠せない。本人に言えば間違いなく殺されるが、傍から見ていると我儘な貴族令嬢とそれを宥める父親と言った所である。

「関東と関西の関係修復のための特使となったネギ坊主を妨害するために関西の者が使った結界術じやよ」

「なるほど……では今回も関西の屑共が妨害しておるといふことか」

「うむ。じゃが、これは原作のよりさらに強力じゃな。鳥居だけでなく周囲の竹林や石畳に石段まで利用してある。特に厄介なのが竹林じゃな……竹は東洋魔術の一部において『生命力』や『成長』を司つておるが、同時に『群』の象徴として扱われることも多い。『似た物、同じ物が複数ある』……鳥居同様に無間方処にはもってこいじゃ。本来この鳥居や竹林は本山防衛のための術式に用いられるはずなのじゃが、上手く悪用されておるわ」

「関西の長、近衛詠春とやらは妾達との和睦を望んでおると聞いておつたが、妾の聞き間違いであつたか？」

「いやいや、間違いではないぞ。近衛詠春は、和睦を望んでおるのじゃ……あくまで、近衛詠春は、の」

それを聞いたベアトリーチエが竹林全体に哄笑を響き渡らせる。部下を御しきれていない関西の長を嗤っているわけだが、長年の付き合ひがある莊子には分かる。

黄金の魔女殿は己の不機嫌さを無理やり誤魔化すために、嗤っているのだと。

（ただでさえ副使という立場に甘んじねばならずイライラしておつた所に、関西呪術教会の妨害、おまけにその長の醜態まで見せつけられれば堪忍袋の緒も軋むという事かの……）

ベアトリーチエがかろうじて理性を保っている間に状況を打開せねばならない。

その為に莊子は己の脳細胞に一つ残らず鞭を入れた。

まず重要なのは、この妨害行為を行っている主犯、それを手伝っている共犯、知っていて黙っている傍観者、何も知らない和平派の区別をしっかりとする事である。

何も知らない和平派は簡単だ、近衛詠春を始めとした関東との関係改善も推し進めている連中である。しかし、残念ながら彼らの人数は今現在圧倒的に少なく、長である詠春がいるからこそ派閥としての体裁を保っているのが実情であろう。

（本山のお膝元で動く馬鹿どもを抑えられんというのが、彼らの弱さの証明じゃのう。この無間方処にも気付いておらんようじゃし……いくら長が剣士出身で術に対する感知能力が低いとはいえ、仲間にある程度の術者いるならこれに気付くはずじゃ。いまだ外からの動きが無いという事は、これに気付いておらず、それすなわち実力ある術者は和平派にはおらんということか……京都を離れて別の地に仕事で赴いておる可能性も無くはないが……それはそれで近衛詠春が京都は自分一人で大丈夫だと、己の力を過信している可能性も含んでおって危うい。事実このような暴挙を許す失態につながっておる。無様過ぎるのう関西の長よ。まあかの者の長就任は、英雄としての名を用いての関東への牽制の意味合いが強かったと聞いておるし仕方が無いと言えば仕方が無いのじゃが……）

サムライマスターも剣士としては一流でも、組織の長としては二流以下かと落胆しつつも莊子は思考を続ける。

（妨害行為を直接行っておるのは、伝統やら格式やらにこだわりの関東の仲も陰険な保守派の陰陽師……もしくは、ワシらの九州征伐で命を落とした者の遺族……その両方の可能性もあるのう。どちら

にせよ、今回の妨害の狙いは約束してある会談の時間までワシらを足止めし、会談をお流れにさせるか……結界を抜け出すためにワシらに『攻撃魔法』を使わせ、その瞬間、ワシらが関西の本拠地に対して敵対・破壊行動を行ったとして首を獲りに来るか……)

莊子は彼らに重きを置いていなかった。

罾や謀略というのは、それがあると見破られた時点でその効力のほとんどを失うのだ。

このような愚行を平然と犯し、己の首を嬉々として締める阿呆など、莊子達の敵ではない。

問題は、彼らではなく、その協力者や傍観するだけの日和見主義者などである。

(協力者は神鳴流あたりかのう……九州征伐では門下の者どもが随分命を散らしておったしな。役割どころは詠春や和平派が事態に気付かぬように工作するか、その他のイレギュラーに対処する遊撃戦力と言ったところか)

京都に着いてからは、彼ら神鳴流剣士と思しき者たちの監視が酷かった。中にはこちらに対する殺気を隠しきれぬ者もいて、ベアトリ―チェも何も言わなかったがかなり不快に感じていたようだ。

(日和見は関西に所属しておるその他大勢。奴らは事の推移を見物しながらどちらにつくべきか見定めておるのじゃろうな)

莊子が何故そんな協力者や日和見主義者を厄介に思っているかと言うと、彼らは直接妨害を行っている者たちとは違い、処断しにくい

のだ。

何故なら、直接的な妨害行為は現行犯として捕えるなり現場に残された証拠などから犯人を追及できるが、間接的な協力者やただの日和見主義者にはそれが通じない。

手伝ったのか手伝っていないのか、知っていたのか知っていなかったのか。

証明は非常に難しい。

これらの事を莊子がベアトリーチェに説明した所、

「くつくつくつくつくつくつく……くはっはははははっ
！！」

普段以上に人を喰ったような笑いを竹林に響かせた。魔力すら含んだその笑いは竹林から生気を奪い、空気すらも平然と澱ませる。

その悪魔的な笑いを何とか収めたベアトリーチェが、ポンポンと煙管で手を叩く。

するとあたり一帯に黄金の蝶が舞い始め、それらはやがて周囲へと飛び散っていった。恐らく莊子が教えたこの結界の核を探しに行つたのだらう。

それは良いとして、先程の笑いが何なのかと問う荘子の視線に対して、ベアトリーチェは悪戯好きな童女そのものの笑みで、胸を張って言う。

「くつくつく……犯人捜しや、協力者の炙り出し……まさに、そうまさにミステリーよな！そしてミステリーは妾の得意分野！！否、ミステリーこそ妾のフィールドにして生まれ故郷！！ならばかの地に妾の敵は無く、あるのはただ妾が活躍する為だけの独壇場のみ！！くつくつく……！」

笑い、嗤う。

嗤い、笑う。

魔女はただ愉快そうに、笑って笑い、嗤って嗤う。

漏れ出た魔力が大地を腐らせ、飛んでいた羽虫は音も立てずに落ちていく。

寝ていたはずの刹那がぐくぐくと震えながら椅子の下へと逃げ込み、

「ちょ、刹那嬢よワシも——」

「あ、あかん！　ここは一人用や！」

同様にそこへ逃げ込もうとした莊子を追い出す。

追い出された莊子が狩られる寸前の兎のような瞳で震える中、ベアトリーチエは椅子から立ち上がり、腰に片手を当て、本山の方角を睨みつけるようにして呟く。

「くつくつく……待つて居れよ関西呪術教会の間抜けども。妾という偉大な魔女の貴重な時間を浪費させた罪は重いぞ。くつくつく、浪費させられた時間分の対価はいたたくとしよう……なあに、心配はいらん。妾は『借金』のとりたてに關しては第一人者と呼ばれてもおかしくは無い。しっかり、きっちり、ばっちりとりたててやるうぞ……くつくつく」

停戦結ぶ前に滅びそうな関西呪術教会に、莊子は先んじて黙禱を捧げた。

第九話 古都で二羽の蝶が舞い踊る 前編（後書き）

あれ？ 停戦協定結びに来たはずなのに関西滅亡フラグが……。

はたして刹那と木乃香は仲良くなれるのか……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3975s/>

異説ネギま！ ～超 鈴音伝 英霊は胡蝶之夢を見るか～

2011年5月7日23時18分発行